

南條は室内を一通り見渡したが、例の小型の蒸汽船の模型を認めて

『此れは——』

と云つて特に熱心に其の船の形を見つめてゐました。

『此れは拙者が工夫中のカノネール、ボートぢや、随分苦心してゐる』

『成程』

南條は面をつきつけるやうにして、其の小形の蒸汽船の模型を前後左右からつくづくとながめ入ります。其の熱心さが設計者の駒井甚三郎にとつては、何物よりも満足に思ふ所らしく、

『よく見て呉れ、そして批評をして呉れ、長さは廿間で幅は四間に
なる。船の構造は先づ自分ながら申分はない積りだ、機關の装置も
多少は研究し、速力も巡陽回天あたりよりも一段とすぐれたもの

になるつもりぢや、併し、今問題にしてゐるのは其れに載せる大砲よ、成るべく大口徑にして遠距離に達するやうに苦心してゐる、それと大砲を据ゑ付くる場所ぢや、此處のブーフに装置するが最も宜からうと思はれる、船體の釣合上大砲が大き過ぎても困る、と云つて従來の例を追うのも愚な事、火薬と瓦斯の抵抗がドノ位まで全體の平均に及ぼすか、それを實地に計つて見たいと苦心してゐる』

駒井甚三郎は、こんな風に説明しながら、今秤臺にかけてゐた細長い形の宜い玉を取つて卓子の上から南條の方に突き出しました。

『成程』

南條は其の船體を見ることが、いよ／＼熱心でありました。

『如何も斯うして調べて實地に當つて見れば見るほど、我ながら智識の足りない事と經驗の淺いことが残念で堪らぬ、だから拙者は思

「ひ切つて洋行して見やうと思つてゐるのぢや」

駒井甚三郎が斯う云ふと、小型の蒸気船の模型を見てゐた南條が急に駒井の面を見て、

「ナニ洋行？」

と云ひました。

「其の決心をしてしまつた」

「それは悪い事ではない、君の學問と才力を以て洋行して來れば其れこそ鬼に金棒じや」

「書物と又聞では齒痒くてならぬ、それに彼地から渡つて來る機械とても、果して其れが本當に新式のものであるやら無いやらわからぬ、彼地では最早時代遅れの機械が日本へ廻つて珍重がられる事も随分あるやうじや、この頃、少しばかり火薬の製造機械を調べてゐ

るけれど、思うやうに感心が出來ぬ、何を扱置いても洋行したい心が募つて静止としては居れぬ」

「大に行くが宜い」

「白耳義のウエツテレンと云ふ處に、最良の火薬機械の製造所があるといふ事じや、その工場を是非見て來たいものだと思つてゐる、併し、それは他國の者には見せぬといふ事じや、己むを得ずんば職工になつて……君のやうに労働者の風をして忍んで見て來たいと思つてゐる」

「君は拙者と違つて美しい男だから労働者にするは可哀相じや、併しそれだけの勇氣のあることが頼もしい、そして何時出かけるつもりじや」

「來月の半に下田を出る佛蘭西の船があるから其れに便乗する事に

頼んで置いた、それで此の通り頭もこしらへてしまつてゐる』

「一人で行くのか」

「従者を一人つれて行く、その外には今の處伴といふものは無い」

「おれも一緒に行きたいな、羨ましい心持がするわい」

と南條は笑ひました。

「君が一緒に行つて呉れば拙者も甚だ心強いけれど、それが知れたら其れこそ第二の吉田松陰じや」

「それでは諦めて君の歸りと土産を待つてゐやう、併し、君が歸つて来る時分には日本の舞臺も如何變つてゐるかわからん、君の土産が江戸幕府のものにならないで或は其つくり我々が頂戴するやうになるかも知れん」

「其んな事はあるまい」

駒井甚三郎は微笑してゐました。

この二人は前に云つたやうに高島四郎太夫の門下に學んだ頃からの熟魂でありました。その故に地位だの勢力だのといふものは頓着なしに、いつも會へば斯うして友達と同じやうな話をするのであります。

「思ひ切の宜いには感心する、我々は西洋の學問と技術はエライと思ふけれど頭まで、さうする氣にはなれぬ」

と云つて南條は此時はじめてらしく駒井甚三郎の刈り分けた佛蘭西式の頭髪をながめました。

「一思ひに斯うしてしまつた洋式の蓬生坊かな」

甚三郎は靜かに艶やかな髪の毛の分目を額際から左へ撫でました。

「でも鬚を切り落す時は、多少は心細い思ひがしたろうな」

「何の……」

「さうだ、駒井君」

南條は此の時になつて、一つの要件を思ひ當つたらしく、

「君は一人で洋行するさうだけれど、君の周圍に當然起るべき様々の故障に就て善後の處置が講じてあるのか、一身を避ければ萬事が納まるものと考へてゐる……無からう」

六

南條と別れた宇津木兵馬は王子の扇屋へ歸つて來ました。扇屋の間には先程から兵馬の歸りを待ち兼てゐる人があります。

一旦尼の姿をしてゐたお君は此處へ來ては、やはり艶やかな髪を三つを片はづしに結うて、綸子の着物を着てゐました。兵馬は刀をこつて其の前に座り、

「まだお寢みにはなりませんでしたか」

「お前様のお歸りを待つて居りました」

「其れほどに御執心故、よいお返事を聞かせてお上げ申したいが……」

兵馬の言葉が濁つて其の容子が萎れるのを見てお君の面色に不安があります。

「残念ながら、最早、この御縁はお諦めなさるより外はござらぬ」

と云ひながら兵馬は懷中から袋入の物と帛紗包みとを取り出して、

「これが、能登守殿より御身へお言葉の代り」

其の品をお君の眼の前へ置きました。その袋入の物は短刀であり帛

紗包みは金子であることが一目見てわかります。

「わたくしは其様なものを戴きに上がったのではござりませぬ」
お君が恨めしさうに其の二品をながめておましたが、其の眼には涙
が一杯であります。

「兎も角も」

と云つて兵馬は其の二品を前へ出したきりで腕を組んでゐました。
兵馬の胸にも實は思ひに餘ることがあるのでありませう。

「宇津木様、どうぞ殿様のお言葉をお聞かせ下さりませ、縁を諦め
よと、それが殿様のお言葉でござりましたか」

「能登守殿は、さうは仰有らぬ、さうは仰有らぬけれど」

「わたくしが殿様から前のやうな御情を戴きたい爲に、斯うして恥
を忍んで上がりましたものか、どうか、それを御存知ない貴郎様が

恨めしい」

「それは拙者にもわかつてゐるし能登守殿も御諒解であるが……」

「そんならば、お言葉をお聞かせ下さりませ、わたくしは賤しいも
のでござりまするけれど、殿様のお家には二つとないまことのお血
筋……其のお血筋がおいとしい爲に恥を忍んで上りました、殿様の
お言葉一つによつて、わたくしは此の場で死にまする」

「又しても短氣な事を」

「いゝえ、短氣な事ではありませぬ、わたくしの小さい胸で考へて
考へ抜いた覺悟の上でござりまする、殿様のお言葉次第によつて、
わたくしも此の世には居られませぬ、恐れ多い殿様のお血筋を、わ
たくしと一緒に彼の世へお伴れ申すのが不憫でござりまする、それ
故に……」

お君は歎か上げて泣きました。

「能登守殿は近いうち洋行なさるといふて居られた」

兵馬は要領を外らして何とつかずに斯ういひました。

「洋行なさるとは」

「この日本の土地を離れて遠い外國へお出で遊ばさうじや」

「エ、遠い外國へ」

お君は涙を拂つて兵馬の面を見つめました。問ひ返す言葉にも力がありました。兵馬が何とつかずに言つたことが、お君の胸には手強い響きを興へたものゝやうであります。

「能登守殿が仰有るには、自分はもう今の世では望みの無い身體じ

や、この隙に西洋を見て來たい、いづれ萬事は歸つてから後の事、

君女の事も、如何してやつて宜いか自分にはわからぬ、其許の思ふ

やうに保護して呉れいとお言葉、歸りは長くて一年、或はまた……

……」

「よく解りました」

兵馬の説明をお君はキツバリと返事をしました。兵馬の重ねて説明することを必要とせぬほどにキツバリと云ひ切つてしまひました。

「もうお聞き申すこともござりませぬ、殿様は前から西洋がお好きでございました、わたくしの事なんぞを今こゝで申し上げたどて、

お取り上げにならう筈がござりませぬ、もうあのお方のお心のうち

は、西洋の學問や何かの事で一杯なのでございます、わたくし風情

が何を申し上げたどて、それに御心配をなさるやうな、賤しいお方

ではござりませぬ、それだけをお聞き申せば、もう充分でござりま

する」

お君としては冷やかな言分でありました。その冷やかな云ひ分のうちには、多くの自棄の氣味、自棄と云はないまでも全くの失望をわざと冷淡に云つてのける頼りない心持を、兵馬にあつても見て取れないといふわけではありません。

『悪く取つてはなりません、能登守殿のお身の上を推量すると、拙者にはお氣の毒でお氣の毒で、どうも立ち入つて強いことが云へない』

兵馬はお君を慰めやうとして能登守の身の上と同情を向けさせやうとしました。併しお君は、やはり冷やかな態度を變へるのではありませんでした。

『如何致しまして、わたくしが殿様のお心持を善からぬやうに御推量申上げるなぞと、其のやうな事がありますものか、如何か御無事で洋行をしてお出で遊ばすやうに蔭ながら祈るばかりでございませぬ、この下されものも其の心で有難く頂戴致しまする』

今まで手にも觸れなかつた袋入の物と帛紗包の二品を手を取つて、お君は懇に推し戴きました。

兵馬はなほ何か云ひたいと思つたけれども、何も云ふことが無いのに苦しみました。それは餘りにお君の態度が神妙であつたからであります。餘りによく解り過ぎてしまつた爲に、兵馬は何を云つて宜いかわからないのであります。

『宇津木様、もう夜も更けました、如何ぞお休み下さいませ、わたくしも疲れました、御免を蒙りたくございませぬ』

お君は二品を膝に置いて言葉丁寧に云ひましたけれど、兵馬には其れが、いつものやうでなく冷たい針が含まれてゐるやうに思はれて

なりません。さりとて何とも其の上に加へねばならぬ言葉はないのであります。

『然らば餘談は明日の事、御免を蒙りませう』

何となく物のはさまつたやうな心持ちで兵馬は己の部屋へ歸つて寢やうとしたけれども、まだ何となく心が、りでありました。

次の間の物音によく心を澄ましてゐるらしかつたが、何に驚いたか兵馬はガバと起つて隔ての襖を蹴開いて、お君の寢室へ跳り入りました。

お君は端座して其の手には、さきほど能登守から贈られたといふ袋入の短刀の鞘を拂つてゐたのであります。

お君は能登守からの短刀の鞘を拂つて、あはやと見える處でした。兵馬は其の手を押えました。

『こゝで御身を殺しては、能登守殿にも申譯が無い、甲州から頼まれた人達へも申譯が無い、これまでの苦心が仇になる、短慮な事をなされるな』

兵馬に抑へられたお君は其れを争うことが出来ません。お君としては兵馬の寢鎮まるのを待つて用意の上で用意しての覺悟でありました。けれども油断なき兵馬の心に乗ずる事が出来ませんでした。

『あゝ、わたくしの身は如何したら宜いのでございませう、あの立派な殿様を世間にお面の立たぬやうにしたのも、わたくしでございませう。貴方様に此んな御迷惑をかけるのも、わたくし故でございませう、生きてゐて宜いのか、死んでしまつて宜いのか、わたしには判りませぬ』

短刀を取られてしまつたお君は其處へ泣き伏してゐます。

「お君殿、そなたの身の上を頼まれたは拙者、殺して宜い時は此の兵馬が殺して上げる、それまでは不足ながら萬事を拙者にお任せ下さい、必ず悪いやうには致さぬ、若しそれを聞かずに再び此のやうな短慮な事をなさる氣ならば拙者にも了簡がある」

兵馬は言葉を強くして斯う云ひました。けれどもお君は其れに對して何の返事も出来ないであります。

「さあ御返事をなさい、此の上ともに萬事を兵馬にお任せ事さるかそれがお忌やならば、此の短刀をお返し申す故、この場で改めて自害をなさい、兵馬が介錯をして上げる、介錯した後には此の兵馬も其まゝでは居られぬのぢや」

兵馬はなほ手強く云つてお君の口から誓ひの言葉を聞かうとするらしくあります。

「そのお返事のないうちは此の場を去りませぬ」

兵馬はお君に向つて飽くまで其の返答を迫るのであります。

「宇津木様、わたくしには何もかも、わからなくなりました、お前様の宜しきやうに」

兎も角も其の場はお君を取り鎮め、萬事を我に任せろと頼もしいことを云つて力をつけたものゝ、兵馬自身によく／＼衷心を叩いて見ると、其れは甚だ覺束ない事です。身一つの處置を如何して宜いかわからないといふのは、お君が自分でわからないのみならず、兵馬にはなほ分つてゐないのであります。慢心和尚から頼まれて引受けて來た時もわかつてはゐない、苦心を重ねて漸く能登守を尋ね當てゝそれを計つて見ると、いよ／＼わからなくなりました。

能登守の立場を見れば、それにお君を會はせて自分が歸つてしまふ

ことは如何しても出来ない事であります。さうかど云つてまた甲州へ連れて戻るわけには行かず……結局、如何すれば宜いのだか兵馬は迷ひに迷つてしまひました。

迷ひに迷つた揚句に兵馬が思ひ起したのは、道庵先生の事でありました。この人へ眞面目に相談をかける事は張合の無いやうな事だけれど、お君といふ人を暫らく保護して貰う事は或は頼みにならない事でもないと思ひました。兵馬は此處で兎も角も道庵へ行つて相談しやうとする心を定めました。

その翌日、兵馬が道庵を訪れやうと用意してゐる處へ、案内があつて一人の立派な武士が兵馬を訪ねて来たといふ事でありました。

『はて、誰だらう』

兵馬は此處へ自分を訪ねて来る立派な武士があらうとは豫期してゐない事でありましたが、迎へて見ると、それは南條であります。成程、今日此處へ訪ねて来るやうに云つてゐたが、前夜の勞働者風の姿のみ頭に残つてゐたから、今斯うして立派な武装をしてやつて來られると頓には其れと氣がつかかなかつたのであります。南條は頓着なく兵馬のゐる一間へ通つて、

『いやお蔭様で駒井と、ゆつくり話をして面白かつた、駒井は近いうち洋行をするさうじや、それは結構な事だ、あの男の學問と器量とを以て洋行して來れば、鬼に金棒といふものだど賞めてやつた』斯く云つて遠慮なく駒井能登守の事を話されるのは兵馬に取つては苦痛であります。兵馬に取つては苦痛でないけれど、一間を隔て、お君の耳に其れを入れることが心配になるのであります。

南條も其れを呑込んだか知らん。

「君、ちよつと外へ出ないか、瀧の川へ紅葉を見に行かう」

南條それがしと宇津木兵馬とは相携へて扇屋を出ました。

兵馬は、南條が自分を何處へ導いて行くのだから知りません。紅葉といふのは出鱈目で王子から江戸の市中へ出るらしいのであります。

時は夕暮で道は淋しい。

この途中、二人は、いろ／＼の事を話し合ひました。人物の評をして見たり、甲府以來の世間話をしたりしました。兵馬は此の人の何時も元氣であつて、好んで虎の尾を踏むやうな事をして屈托しない勇氣に感服する事であります。それで識見や抱負の低くないことも尊敬せずには居られない處から、ふと自分が迷つてゐる女の處分方も此の人に打ち開けて見たならば、また潤達な智慧分別も聞かれは

しないかと思ひました。

そこで、思ひきつて一伍一什を南條に打ち開けて、さて如何したら宜いものかと、しほらしく其の意見を叩きました。

それを聞いてゐた南條は事もなげにカラ／＼と笑つて、

「君が其の婦人を引受けたら宜いだらう、駒井から貰ひ受けたら宜いだらう」

「エ、」

兵馬は眼を圓くしました。南條は眼を圓くしてゐる兵馬の面を調戲うものゝやうにながめながら、

「理窟を考へちや可かん、君が其の女の身を心配するならば、一層引受けて夫婦になつてしまふが宜からう」

兵馬は、返事が出来ないほどに呆れてしまひました。

『は、は、は』
南條は本気で云つたのか冗戯で云つたのか知らないが、高笑ひをして此んな事は朝茶の前の問題と云つたやうな體たらくであります。

『そんな事が……』

兵馬は落膽するほどに呆れが止まりませんでした。前に云ふ通り此の人の志氣や抱負には敬服するけれど、それは時代の事や政治の事丈で、男女の問題にかけては、こんな風に大ざつぱで、且つ低い觀念しか持つてゐない人かと思へば、大切な問題を、こんな人に打ち開けた事を悔ゆるの心をさへ起しました。南條はやはり事もなげに言葉をツイて、斯う云ひました。

『其れが可けなければ斬つてしまへ、其の女を斬つてしまふが宜い、斯う云へば無慈悲のやうだけれども、それは男子らしい處分と

云へない事もない、紀州の殿様で、自分の生みの母を手討にしてしまつた人がある、産みの母といふのは先殿のお手かけであつた、自分には現在の實の母であるのを、腹の賤しい母を生かして置いては他日國家の患が其處から起り易いであつて、罪もないのに手討にしてみました、自分の母をさへ家門の爲には斬つてしまつた殿様がある、それを思へば君の引かゝつてゐる女なんぞは何でもない、一時の小さな情に引かゝつてゐると大事を誤る事がある、一殺多生といふのは其れだ、其の女一人を斬つてしまへば、駒井も引かゝりが無くなる、君も解脱が出来る、其の女も君に斬られたら往生が出来る事だらう、男子は其の位の勇氣が無くてはならぬ、女々しい小慈小仁に捉はれてゐるやうでは大事は成せぬ』
これは餘りに亂暴な議論であります。さきに慢心和尙は女を沈めに

かけると云つて兵馬を驚かせました。其れは慢心一流のズボラであつたけれど、この男の云ふ議論は實行と交渉のある議論であるから險呑です。

七

兵馬と南條なにかしどが斯うして王子を立て、江戸の市中向けて出かけて行つたと同時に、これはまた板橋街道の方から連れ立つて王子の方面へ入つて来る二人の旅人があります。可なり長い旅をして来たものらしく、直接に江戸へ入らない處を見ると或は王子を通り越して千住方面へ出るつもりかも知れません。先に立つたのは、やゝ脊の高い男、あどのは中脊で前のよりは年も

若い男

「兄貴」

人通りの絶えた處で後のが聲をかけました。その聲を聞くと何の事はない、これは執念深い片腕の男、がなりきの百でありました。

「何だ」

振り返つたのは取りも直さず七兵衛であります。

「今夜は何處へ泊るんだ」

百蔵は今ごろ此んな事を云つて七兵衛に尋ねて見るのもワザとらしくあります。

「何處にしやうかなあ」

歩いて来るには歩いて来たものゝ、二人はまだ何處と云つて定めた宿が無いものゝやうであります。

「今つから此の姿で吉原へも行けめへじやねへか」
どがんだりきが云ふ。

「さうよ」

「王子の扇屋へ泊らうじやねえか」

「可けねへ」

七兵衛が首を左右に振りました。

「如何して」

がんだりきは笠越しに七兵衛の面を見る。

「彼處は此の頃、役人が出入をしてゐる、瀧の川の方に普請事があつて、それであの家が會所のやうな事になつてゐるから上役人が始終出入をしてゐるんだ」

「さうか」

がんだりきも暫らく口を噤んでしまひました。口を噤んでも二人は、なほ、せつせと道を歩いてゐるのであります。

「それじや如何するんだ」

がんだりきが、また駄目を出しはじめました。

「如何しやうか、お前よく考へて見な」

七兵衛は、煮えきれないのであります。がんだりきは其れをモドかしがつて、

「考へて見など云つたつて、兄貴が其の氣にならなけりや仕方が無え、實の處は俺等はモウ小遣錢も無えのだ、さし當つて何とか工面をしなけりやあならねえのだが、兄貴だつて同じことだらう、命辛くで甲州から逃げて來たんだ、ここまで息を吐く暇もありやしねえ、いくら人の物を我が物とする、こちと等だつて、海の中から潮水を

掬つて來るのとは譯が違ふんだ」

「今夜は何とか仕事をしなくちやならねへな」

「知れた事よ、その事を云つてるんだ、今聞けば、扇屋は何か役人の普請事の會所になつてゐるといふぢやねえか、其處へ一つ今晚は御厄介にならうぢやねえか」

「俺もさう思つてるんだ、普請事といふのは何か鐵砲の煙硝藏を立てるとかいふ事なんださうだ、何しろお上の仕事だから小さな仕事ではあるめえと思ふ、お金方も出張つてゐるだらうし、突つて見たら一箱や二箱の仕事はあるだらうと思ふ」

「そいつは耳よりだ、兄貴、お前はいゝ處へ氣がついてゐた」

「だから、さう定まつたら何處かで一休みして、ゆつくり出かけるよ仕様」

「合點だ」

斯う云つて二人は板橋街道の夕暮を見渡しました。

その晩になつて、王子権現の境内へ二つの黒い影が、異つた方からめぐり合はせて來て稻荷の裏でバツタリと面が合ひました。

「兄貴」

「百か」

前の通り二人は百藏と七兵衛とです。板橋街道の夕暮で見た二人の姿は純然たる旅の人でありました。こゝでは忍びの者のやうな姿ではありません。けれども二人共脇差は差してゐて、足も亦嚴重に固めてゐました。

「如何した」

「冗談ぢやねえ」

頭と頭とを、こつきらこつとするほどに密着けて、百藏が、

「役人の會所になつてゐるといふから、容子を見てゐりやあ、役人らしいのは一人も泊つてゐねえちや無えか、それに普請のお金方とやらも詰てゐる鹽梅は無えし、ふりの宿屋と別に變つた事は無え、何も俺等と兄貴が斯うして息を詰めて仕事にかゝるがものは無えんだ、兄貴にしちあ、近頃の眼違ひだ、お氣の毒のやうなものだ」
 少しばかり、せゝら笑つてかゝると、七兵衛は、それを氣にかけないで、

「其れに違えねえ、おれも容子を見てから此りや抜かつたと直に氣がついたから、引き上げやうと思つてると、手前が何に當りをつけたか奥の方へグン／＼と入り込んで出て來ねへから、引返すわけにも行かなかつたのだ、こりやあ強ち俺の眼違えといふわけでも無え

のだ、この間までは確に此處が會所になつてゐたのだが、普請が出來上つたから、彼方へ移つたのだらう、餘まり遠い所でも無えから一つ此の足で其の新しい普請場の方へ出かけて見やう」

「成程」

「さあ出かけやう」

この二人は、板橋街道で打ち合せた通りに王子の扇屋を覗つたものであつたに違ひないが、その見込が少しく外れたものであるらしい。けれども外れた見込は遠くもない處で遂げられさうな自信を以てゐるらしい、七兵衛は、百藏を引き立て、其の方へ急がうとすると、

「普請場とやらへは兄貴一人で行つちや貰へめえか」

「ナニ、おれに一人でやれといふのか」

「俺等は、どうも其方の方は気が進まねえ事があるんだ」

「ハテな」

「實は、扇屋で今見つけ物をして来たから、その方が心が、りになつて、金なんぞは餘まり欲しくも無くなつたのさ」

「おや／＼」

「さう云ふわけだから、兄貴一人で普請場へ行つて當座の稼ぎをして来て呉んねへ、俺等は俺等で自前の仕事をして見てえんだ」

「この野郎、扇屋の女中部屋の寢像にでも見惚れて、また良くなえ了見を出したと見えるな、世話の焼けた野郎だ」

「まあ可いから任して置いて呉れ、兄貴は兄貴で兵糧方を持つて貰ひてへ、俺等は俺等で、これ見たかといふ事を別にして見せるんだ」

「また、笹子峠のやうに遣り損なつて泣面をかゝねへものだ」

「ナニ、あの時だつて、まんざら遣り損なつたといふものでも無えのさ、それにあの時は相手が相手だけれど、今夜のは、たつた一人抛りつばなしにしてあるのだから、袋の中の物を持つて来るやうなものだ」

「まあ、廢せと云つても廢すのぢや有るめえから、手前の勝手にして見るが、いゝ、懲りて見るのも樂だ」

「有難てえ」

二人で一緒に仕事をする筈であつたのが、此處で二つに分れて仕事を
をする事になります。

こゝで二人の良からの者が手筈を分けて、一方は火薬製造所の普請場の方へと出かけて行き、一方はまた扇屋をさして出かけて行くこ

とに定まつたらしくあります。が、
 がんり、きの方、心得て直様其の場から姿を隠したが、七兵衛は少しばかり行つて踏みとどまり、

『野郎、一體何をやり出すんだか』

と云つて七兵衛は普請場の方へ行かうとした爪先を變へて、がんりきが出て行つた方へ素早く歩き出した處を見ると、そのあとをつけて、あの小さかしい片腕が何を見つけて何をやり出すのだから、其れを突き留めやうとするものらしくあります。

やゝあつて七兵衛は、音無川の岸の木蔭の暗い處から扇屋の裏口を覗いて立つてゐました。何處と云つて起きてゐる家はなく、さうかと云つて、今、がんりきが忍び込んでゐるらしい物の音も聞えませぬ。けれども七兵衛は、此の口を守つて、中からの消息を待つて動

かないのは、何か自信があるらしいのであります。

果して椽側の戸が一枚明けてあつた處から、人の頭がうごめき出でました。

『出たな』

と云つて七兵衛は微笑みました。

成程、それは人影である。闇の中でも慣れた目でよく見れば、中から這ひ出すやうにして庭へ下りる人は小脇に白い物を抱えてゐる。とがわかります。其の物は何物であるかわからないけれども、其れを片腕に抱へて極めて巧妙に家の中から脱け出して來たものである。ことが一見してわかります。

七兵衛は、凝と其の容子を見てゐました。果して其の黒い人影は庭へ下り立つたが、其處で前後を見廻して暫らくゐんでゐました。

待つてゐた。この裏木戸へ來たら出合頭に取つて押へてやらうと、は、笑んでゐた七兵衛のゐる方へは、ちよつと向いたきりで、人影は庭の燈籠の影へ小走りに走つて行くど急に姿が見えなくなりました。

「おや」

七兵衛は少しばかり泡を食つて再び眼を拭つて見たけれど、それつきり人影が庭から姿を掻き消すやうになつてしまつたから、

「出し抜かれたかな」

木の繁みから音無川の谷の中へ下りて見た處が其處に忍び返しをつけた塀があります。

「此奴は可けねへ」

七兵衛に其の下を潜らうとしたが、上を乗り越えやうかと思案した

けれど、それは咄嗟の場合、さすがの七兵衛も、如何していゝかわからぬ位の邪魔物でありました。

「ちよッ」

仕方が無いからわざ／＼岸へ上つて、家の廻りを遠くから一廻りして表へ出て見ました。

斯うして前後を見廻したけれど、今、庭で立ち消えになつたが、いさゝきの姿は何れにも認める事が出来ません。

「野郎、まだ中に隠れてゐるな、おれが後をつけた事を感じたものだから、此の屋敷の中で立往生をしてゐやがる、それとも外の抜道をこしらへて置いたものか、それにしても手廻しが宜過ぎるが、如何しても、あの裏手より外に逃げ道は無え筈なんだが……ハテ」

七兵衛は、また裏の方へ廻つて見ました。そこでもまた再び其の影

も形も認める事が出来ないから、兎も角も中へ入つて見やうとする
氣になつたらしく、密と其の木戸を押して見ると雑作なく開いた途
端に、

「泥棒、泥棒、泥棒」

泥棒、泥棒と騒ぎ立てられた時分には、七兵衛もがんどさも最前の
権現の稻荷の社前へ来てゐました。

「兄貴、細工は流々、この通りだ」

が、んりきは社前の前へ腰をかけて自慢さうに鼻うごめかすと、七兵
衛も同じやうに腰をかけて苦笑ひ。

「一體、そりや何の真似だ」

「何の真似だと云つたつて兄貴、お前と俺等が甲府でやり損なつた

仕返しが如何やら此處で出来たといふもんだ、自分ながら思ひ設
けぬ手柄だ、兄貴の前だけれども、斯ういふ事はおれで無くつては
出来ねえ藝當なんだ、抑々此處へ伴つて来た女といふのを、兄貴、
お前は一體誰だと思ふんだ、お前の其の皮肉な笑ひ方を見ると、ま
たおれが女中部屋の寢像に現を抜かして、つい此んな性悪をやらか
したやうに安く見てゐなざるやうだが、憚りながら其んな玉ぢやね
えんだ、尤も、おれもはじめから、其の見込で入つたわけではなし
兄貴の差圖で入つたのだから、手柄の半分はお前の方へ譲つてもい
ゝやうなものだが、兄貴だつて、この代物が此の通りといふことは
まだお氣がつくめえな、おれが語り聞かした上で、其れと合點が行
きやあ、成程、百、手前の腕は片一方だが、兩腕のあるおれが恐れ
入つたものだ、見上げたものだ、こゝに初めて兜を脱ぐに違えね

え

「何を云つてるんだ」

「まあ、緒から引き出して話をする、抑兄貴とおれとが、甲府のお城のお天守の天邊でした彼のいたづらから事の筋が引いてるんだ、あの時、二人で提灯をブラ下げて甲府の町の奴等を噪がせて、天狗だとか魔物だとか云はせて、溜飲を下げて見たけれど、憎らしいのは、あの勤番支配の駒井能登守といふ奴よ、あいつが鐵砲を向けたばかりに此方は、すづかり化の皮を剥がれて、二度とあの悪戯が出来なくなつたんだ、其れも兄貴、あの時に、あの能登守といふ奴が、打つ氣で覗ひをつけたんなら、兄貴の身體でも、おいらの身體でも微塵になつて飛ぶ筈の處を、ワザと提灯だけを打つて落したのが皮肉じやねえか、あんまり癪にさわるから、其の後、何ん

とか、あの能登守に、いたづらをしかけて溜飲を下げてやらなくちやあ、七兵衛はいざ知らず、がんりきの估券が下がるからと、色々苦心はして見たけれど、どうも兄貴の前だが、やつぱり彼の屋敷には豪勢強い犬がある、それで浮かり近寄れねへでゐた處へ、急にあの能登守がお役替で江戸詰といふ事になつたと聞いて、手の中の珠を取られたやうに思つた、處が今夜といふ今夜、ほんとうに思ひがけなく、思ふ存分に其の仕返しが出来た事を思うと、天道様がまたこちと等をお見捨てなさらねへのだ、俺等は甲州から持ち越した溜飲が初めてグツと下がつたんで、嬉しくて堪らねへと云つて、獨よがり在此處へ並べて永く兄貴に揶ぐつてえ思ひをさせるのも罪な話だから、打ち明けてしまふが、實は俺等が今こゝへ連れて來た女といふのは別じやあ無え、甲府にあつて一問題起した例の能登守の大

切の大切のお部屋様なんだ』

『エ、』

『如何なものだ』

が、いりきは、いよ／＼得意になつて社殿の中を尻目にかける。この社殿の中へ、その手柄にかける當の者を運び來つて隠して置くものらしくあります。其れでが、いりきは尙ほ得意になつた七兵衛をも尻目にかけてながら、

『俺等は、たゞ斯うして溜飲を下げさへすりや其れでいゝのだ、何も此のお部屋様を煮て喰はうとも焼いて喰はうとも云ひはしねへのだ、これから先の料理方は兄貴次第だ、宜しくお頼み申してへものだな』

が、いりきは此んな事を云つて、さて猿臂を延ばして稻荷の扉の中へ

手を入れて何物をか引き出さうとしました。それは七兵衛に取つても多少の好奇心であり、また心安からぬ事でないではありません。この野郎、本當に其の女を此處へ浚つて來たのか如何か、本來、斯ういふ事を手柄に心得てゐる人間にしても、餘りに無茶で亂暴で殺風景であるから、七兵衛もムツとして苦い面をして、が、いりきを睨めてゐました。

『それ此の通りだ』

と云つてが、いりきが、苦い顔をしてゐる七兵衛の眼の前へ突きつけたのは、やゝ身分の高かるべき女の人の着る一領の襦袢と別に何かの包みでありました。幸にして其處には此の襦袢を纏うてゐた當の人の姿は見えないのでありました。

『此れが如何したんだ』

七兵衛は其の襦褌ど、がんりききの面を當分にながめてゐると、がんりきは、

『これが其の講釋で聞いた晉の豫讓とやらの出來損ないだ、おれの片腕では、残念ながら正のまゝであの女を如何する事も出來ねへんだ、時と暇を貸して呉れたら、如何にかならねへ事もあるめへが、さし當つて今夜といふ今夜、あれを正のまゝで物にするのは六つかしいから、其のあたりにあつた此の襦褌ど、床の間にあつた此の二品、どうやら此れが金目のものらしいから、引渡つて出て來たのだ、兎も角も、これだけの物があれば、これを道具に、能登守にいたづらをしてやる筋書は、いくらでも書けやうといふものだ、此の襦褌を見ねへ、地は縮緬で、模様は松竹梅だか何だか知らねへが随分見事なものだ、それで此の通りいゝ香がするわい、伽羅とか沈香とか

いふ奴の香りなんだらう、これを一冊、能登守に持つて行つて狂言の種にして、奴が如何な面をするか其れを見てやりてへものだ、此方の方の二品は此れや錦の袋入の守刀と來てゐる、もう一つはズツシリとした此の重味、此の二つ共殿様からの御拜領なんだらう、まだ結び目も解かず封も切らずにあるやつが、手つかず此方へ授かつたといふのも返すく、有難え話だ、さあ、兄貴、俺等の方は此の通り先づ、當座の仕事としては大當りに近い方だが、兄貴の方の仕事は如何なるんだ、まだ此れから出かけて見ても遅いわけではあるめへから、其の舶來の烟硝藏とやらへ俺等もお伴をして見てへものだな』

がんりきは引つゞいて手柄話と盗んで來た品物とを、鼻高々と七兵衛の前へ並べて吹聴してゐるのを七兵衛は、やはり苦々しく聞いて

わたが、

『成程、そいつは可なり氣の利いた仕事をしたものだ、けれど、その手前が甲府から持ち越の意趣を晴らしてへといふ當の相手は何處にゐるんだ、甲府で失敗つた活登守といふ殿様は、今江戸にも姿が見えねえのだ、さうして田舎芝居の盲景清のやうに恨みの衣裳を引張り廻して見た處で、肝腎の頼朝公が不足してゐたんじゃあ芝居にもなるめへじやねへか』

七兵衛は斯う云つて、がんりきを馬鹿にしたやうな面をすると、

『ナニ、あの女が此處にゐるからには大將だつてマンざら遠い處にゐるでもあるめえ』

『手前は、まだ其の見當がつかねえのか』

『兄貴、お前はまた其れを知つてるか』

こんな事を話し合つてゐるうちに二人の話がハタと止んで、やがて瀧の川の方面へ忍んで行くらしくあります。

その翌朝、駒井甚三郎は、例の研究室の前の扉に、ふと妙なものがかゝつてゐるのを認めました。

皮を剥いたものゝやうに、一枚の襦袢が扉に張りつけてありました。その上に刀の小柄を突き刺して其れに錦の袋に入れた守刀様のものがブラ下げてありました。

駒井甚三郎が其れを見た時は、まだ夜が明け離れないうちで、誰も其の以前に氣がついたものはありませんでした。それと一眼見ると駒井甚三郎の面に非常な不快な色がサツと流れました。それは襦袢も守刀も共に見覚えのある品でありました。篤と見てゐるうちに

いよ／＼不快の色で満たされてこの時は、さすがに此の人も其の憤懣を隠す事が出来ないらしくありました。

けれども、また直に窓掛を下ろして姿を研究室の奥深く隠してしまひました。駒井甚三郎は再び此の不快な一種の曝らし物に眼を注ぐことは無かつたけれど、程なく其の襦袢と守り刀の袋とは何者かの手によつて取り外されて何處へか隠されてしまひました。

それから程経て、馬を驅つて此の普請場から出て行く、一箇の人影を見ることが出来ました。恐らく其れは此の普請場を早朝から巡視に來た役人であつたらうけれど、笠を深く被つてゐたから誰とも知ることが出来ません。

その人は馬を驅つてやゝ暫らく行つた時に、途中で行き會つた百姓らしい男を呼び留めて、

「これ／＼」

「はい」

「お前は王子の方へ行くと見えるな、氣の毒ながら此れを扇屋まで届けてもらひたいものじや」

「へえ／＼、宜しうございますとも」

頼む人が身分ありげな人であつて、頼む言葉も叮嚀であつたから、頼まれた百姓は恐れ入つて承知をしました。幸ひこの百姓は扇屋の方へ行くべき序の百姓でありました。馬上の人が取り出したのは一封の手紙らしくあります。

「たゞ此の手紙を持つて扇屋へ立寄り名宛の人に渡してもらへば宜しい、名宛の人が居らぬ時は、預けて置いて宜しい、返事は要らぬ、これは些少ながらお禮の印、取つて置いて貰ひたい」

「如何致しまして、ほんのついでとございますから、此んな物を戴いては済みましねえでございます」

馬上の人はお禮の寸志として、いくらかの金を與へやうとしたのを律儀な百姓は容易に受けやうとしました。それを強いて取らせると、百姓は幾度も幾度も繰返してお禮を云ひ、その手紙を請取り、金の方は戴いていゝのだから悪いのだから、まだ判らないやうな面をしてゐるうちに馬上の人は、

「然らば、確とお頼み申したぞ」

とばかり馬に鞭を呉れてサツサと歩ませて行きました。百姓は其の後姿を見送つて、

「お代官様見たやうなエライお方だ、何處のお邸のお方か知らねへけれど」

と云つて、其の百姓は今受取つた手紙の表を見ると、美事な筆蹟で

「扇屋にて、宇津木兵馬殿」

と記してありました。

扇屋の一間にお君は兵馬を待つてゐました。遅くも歸るであらうと待つてゐた兵馬は遂に歸りませんでした。

兵馬の身の上にも何か變事は無かつたらうかと、其れが心配になつて心細いよりは怖ろしさに堪へられないやうでありました。

昨夜床に就いて、うとくどしかけたのは可なり夜が更け渡つた時分でありました。その時に、枕許に人の足音のすることを儘にお君は氣がついてゐました。

兵馬を待ち兼ねてゐる心持だけで、それに氣がついたのでありませ

ん。お君は物を用心する女でありました。斯うなつて見ると、自分の身が何物より大切に思はれるし、また頼りなくも思はれてならぬのに、この女は、古市にあつて、撥を揚げて、旅人の投銭を受ける事を習はせられた手練が、自ら心の油断を少くしてゐました。ふと眼が醒めた時に、

「誰じや」

誰じやと答めて見た時に、その應答がなくて何か急に自分の身の上へ押しかゝるものがあるやうに思つたから、急いで褥を飛び起きて「誰方かお出會ひ下さい、悪者が……」

斯う云つて叫びを立てると、

「エ、、忌えましい」

と云つて、枕を拾つてお君に打ちつけたのは怪しい頬冠りの男でありました。

「あれ——」

お君は此の場合にも身を避けて、その投げつけた枕を外すと、それが行燈に當つてバツと倒れて燈火が消えて暗となりました。

「誰方ぞ、お出で下さい、悪者が……」

この聲で扇屋の上下は、悉く眼をさました。その騒ぎと暗とに紛れて、悪者は疾に何處へか出て行つてしまつて、扇屋の若い者などは空しく力瘤を入れて、その出會はせることの遅かつたのを口惜しがりました。幸にしてお君の身には何の怪我もありませんでした。他の客人にも、家の人にも雇人にも女中にも何の怪我もありませんでした。盗難は……盗まれたものは、それを調べて見るとお君は面の色を變へないわけには行きませんでした。

衣桁にかけて置いた打掛と、それから先程兵馬の手を通じて。主君の駒井能登守が手づから贈られた記念の二品が確かに失くなつてゐるのであります。これはお君に取つては身にも換へられないほどの大切な品でありました。

さりどて此處で其品物の名を擧げて、宿の者にまで駒井能登守の名を出したくはありません。兵馬さへゐたならば何とでも相談相手にならうものを、昨夜に限つて戻つて来ないことを、残念にも怨みにも、お君は一人でハラ／＼する胸を押へてゐました時に、帳場から一封の手紙を屈けて來ました。其の手紙が宇津木兵馬宛になつてゐることを知つて、兎も角も自分が預かる事になりました。

間もなく宇津木兵馬は一人で立ち歸つて來ました。

昨夜の出來事を聞いて驚いた上に、さき程預けられた手紙を渡され

てそれを讀むと、急いで何れへか出かけました。

兵馬の出かけた先は彼の火藥製造所に駒井甚三郎を訪ねん爲でありました。いつもの處に來て音のうて見たけれども、もう其の人は其處に居りませんでした。誰に尋ねて見ることも出來ず、尋ねて見ても知つてゐる人はありません。

兵馬は空しく、先刻の手紙を繰展べて讀んで見ると、簡單に、

感ずる處あつて、當所を立退く、行先は當分誰にも語らず、後事宜しく頼む

といふ丈けの意味であります。

駒井甚三郎は遂に何處へ向けて立ち去つたか知る事が出來ません。何故に左様に事を急に立ち去らねばならなくなつたのか、推察するに苦しみました。或は其の企てゝゐる洋行の機が迫つた爲に、斯う

して急に立ち去つたものかとも思はれるが、どうも文面によると其ればかりではないらしく思はれてなりません。其の日のうちに、宇津木兵馬はお君を連れて扇屋を引き拂つてしまひました。

八

甲府の躑躅ヶ崎の神尾主膳の別邸の広い庭の中に盤屈してゐる馬場の松の根方に、もう幾日といふもの鐵の鎖で二重にも三重にも結ひつけられてゐる一頭の猛犬がありました。

これは間の山のお君に取つては唯一無二の愛犬であつたムク犬であります。影の形に添うやうにお君の後にもムク犬が無ければならな

かつたのに、それが向嶽寺の尼寺から、瀧の川の扇屋に至るまで、後を追つた形跡の無いといふ事は寧ろ不思議であります。

ムク犬を捕へて離さないのは、此の馬場の松の老木と其れに絡はる二重三重の鐵の鎖でありました。

松の樹の下に繋がれてゐるムク犬には誰も食物を與へるものがないらしくあります。

それ故に、さしもの猛犬が、いたく衰へて見えます。眞黒い毛が縮れて、骨が立つてゐます。前足を組んで、首を俛れて、沈黙してゐます。

もう、可なり長いこと、こゝに繋がれてゐる筈なのに、絶えて吠える事をしないから、誰も此處に此の犬が繋がれてゐることをさへ外では知つてゐる者は無いやうです。

たまく、附近の野良犬が此の屋敷へ入り込んで、何気なく此の近い處へ来て、松の樹の下にムク犬の姿を認めると、急にたぢろいて、尾を股の間に入れて逸早く逃げ出す位のものでありました。

ムクが吠えないのは吠えても無益と思ふからでありませう。吠えて見た處で、今や此の甲府の界限には自分の聲を理解して呉るものが無いと諦めてゐる爲かも知れませんが。それが無い以上は、いかに自分の力を恃んだ處で、馬場美濃守以來といふ老木を根こぎにする事は不可能であるし、大象をも繋ぐべき此の二重三重の鎖を断ち切る事も不可能であることを、徐に觀念してゐる爲でありませう。斯うしてムク犬が沈黙してゐると或日此の屋敷の裏口から怖るゝ入つて来た二人の男がありました。

「へえ、御免下さいまし、御本宅の方から頼まれてお犬を拜見に上

りました、誰様もおゐではございませんか、おゐでがございませぬければ、お許しが出てゐるんでございませぬから、御免を蒙つてお庭先へお通しを願ひまして、お犬を拜見が致したいのでございませぬが誰様もおゐではございませんでございませぬか」

二人の男は、極めて卑下した言葉で屋敷の中へ申入れましたけれども、誰も返事をする者がありませんから、そのまゝ怖るゝ庭の中へ入つて行きました。

この二人の男の風態を見ると、二人共に古編笠を冠つてゐました。二人共に目の細かい駕籠を肩にかけて、穢れた着物を着て、草鞋を穿いてゐました。籠の中に數多の雪駄を入れた處、言葉つきの卑下してゐる處や、態度のオド／＼してゐる處などを見れば、一見してこれは雪駄直しか犬殺しかの種類に屬する人間であることがわかり

ます。

「へえ、御免下さいまし、お犬を拜見に出ましてございます」

誰も挨拶をするものが無いのに、卑下した言葉をかけながら泉水、池、庭を怖るく通つて、例の馬場の松の大木の下までやつて來ました。

「長太、これだく、こゝにゐたよ、こゝにゐたよ」

二人は立ち留まつて、やゝ遠くからムク犬の姿をながめて指さしました。

「成程、こいつは大い犬だ、近頃の掘出物だ、殿様が皮が欲しいと仰有るのも御無理は無え、これなら下手な熊の皮より、よつぽど太したものだ、殿様は生皮を剥くと仰有るが、この位の奴に荒れられると、生皮を剥くには可なり骨が折れる、何でも宜いから殿様は生

きたまゝで此奴の皮を剥いて見ろと仰有る、剥く處を御覽になりたいと仰有る、さう仰有られて見ると、こちと等も商賣冥利で、見事に生きたまゝで皮を剥いてお目にかけますと、云はずには居られねえ、けれども、長太、こいつには、ちつと骨が折れるぞ、いゝ加減弱つちやあるやうだが、無暗に吠えねえで悠々と寝てゐる處を見ると、膽つ玉がありさうな畜生だ、長太、棒を貸しねへ、些どばかり突いて怒らして見ねへけりあ、ドノ位の奴で、どの位にあしらつて宜いかがわからねえ」

二人はソロく寝てゐるムク犬の傍へ近寄つて來ました。

二人の犬殺しがソロくと近寄つた時に、ムク犬は漸く頭を擡げました。

頭を上げたけれども、いつものやうに勇猛の威勢あるムク犬ではあ

りませんでした。二人を見据ゑる眼の力さへ、やゝもすれば眠りに落つるやうな元氣のないものでありました。

『畜生、弱つてやがる、これなら大丈夫だらう』

二人の犬殺しは、頭を上げたムク犬の相好を暫らく立つて見てゐたが、一人が棒を取り出して、

『やい、畜生、如何した』

と云つて、其の棒をムク犬の顎の下へ突き込みました。その時にムク犬は眠さうな眼をチロリと睜つて、二人の犬殺しの面を下から見上げました。

『畜生、如何した』

顎の下へ突つ込んだ棒を犬殺しは自棄にコヂリました。

その時に眠つてゐたやうなムク犬の眼が、俄然として螢の光のやう

に耀やきました。それと共に今自分の腮の下へ自棄に突込んでコヂ上げた棒の一端にガブリと其の口で噛みつきました。

『此奴は可けねえ』

電氣に打たれたやうに、犬殺しは其の棒を手放して一間ばかり飛び退きました。犬殺しの手から噛み取つた棒はムクの口から放れません。牙がキリ／＼と鳴りました。さしもに堅い樫の棒の一端は見る／＼篋のやうにムク犬の口で噛み砕かれてゐました。

『こん畜生、嚇かしやがる、こいつは中々一筋縄じゃあ行かねえ』
犬殺しは胸を撫でながら再びムク犬の傍へ寄つて來ました。俄然として醒めたムク犬の勇猛振は、慥に此の犬殺し共の膽を奪うに充分でありました。けれども其の繋がれてゐる巨大なる松の樹と、それに絡まつてゐる二重三重の鎖は、また彼等を安心させるに充分であ

りました。

「可いけねえ、いくら弱よりきつた畜生ちくしやうだからと云いつて、突だ然じに棒ぼうを出だせば怒おこるのは當あたり前まへだなあ、犬いぬも歩あるけば棒ぼうに當あたるといふのは其それだあな、棒ぼうなんぞを出ださねえで、もつと素直すなはに欺だましてかゝらなけりやあ、畜生ちくしやうだつて思おもうやうにはならねへのさ」

犬殺いぬころし共ともは何なにか不得ふざく要領やうりやうな事ことをブツ／＼云いつて立たち戻もつて來きて、さきに卸おろして置おいた籠かごを提さげて、またムク犬いぬの傍そばへ近ちか寄り、

「如何どうだらう、まあ、この堅かたい棒ぼうを籠かごのやうにしやがつたせ、恐おそろしい齒はの力ちからだ、死物狂しにものぐるひとは云いひながら、まだ此こんなに恐おそろしい齒はを持もつた畜生ちくしやうを見た事ことが無なえ、成程なるほど、これじゃあ殿様どのさまが持もつて餘あまして鎖くさりで繋つないでお置おきなさるのものはあらあ、さあ、こん畜生ちくしやう、今度こんどは棒ぼうぢやあ無なえぞ、御馳走ごちそうをしてやるんだぞ、それ、これを食べくへ」

籠かごの中から取り出したのは竹たけの皮包かわづかの握飯ひぢりびでありました。これは此この者もの共ともの辨當べんたうではなくて、犬いぬを懐なつける爲ために、ワザ／＼用意よういして持もつて來きたものらしくあります。

「さあ／＼、櫛かしの棒ぼうなんぞを、がり／＼と嚙かんでゐたつて仕方しかたが無なえ、これを食べくつて温和をんなしくしろ、そのうちに痛いたく無なえやうに皮かわを剥むいてやるから、殿様どのさまに頼たのまれたんだから、おれ達たちも晴はれの仕事しごとなんだ、あんまり騒さわがねえやうに剣はがして呉くれろよ」

斯かう云いつて投なげてやつた握飯ひぢりびが鼻はなの先さきまで轉ころがつて來きたけれども、ムク犬いぬは其それを一目見ひとみたきりで、口くちをつけやうともしませんでした。

「おやく、こん畜生ちくしやう、行儀ぎやうぎが宜よくてゐやがらあ、こんなに瘦やせつこけて餓かえてゐる癖くせに」

二人の犬殺しは拍子抜のしたやうに立つてゐました。

神尾主膳は此の頃、躑躅ヶ崎の下屋敷へ知人を集めて一つの變つた催しをする事に決めました。

それは或時、神尾が二三の人と話の序に此んな事が問題になりました。

『精力の強い動物は、極めて巧妙にやりさへすれば、皮を剥がれても生きてゐる、生きてゐて皮を剥がれたなりの姿で歩く事も出来るものだ』

と主張する者がありました。

『そんな馬鹿な事があるものか、いくら強い動物だからと云つて、全身の生皮を剥がれて其れで生きてゐられる筈があるものか、況し

てそれで歩ける道理があるものか、途方もないことを云はぬものだ』と反駁する者もありました。

『それがあるから不思議だ、先づ古い處では古事記にある因幡の白兔の例を見給へ』

と云つて主張するものは、大國主神が鰐に皮を剥がれた兔を助けた話から、

『それは神代の事で何とも保証は出来ないが、近くこれくの處で猫の生皮を剥いで其れが歩き出した、犬を剥いて試して見た處が、それも見事に歩いたといふ事を確かな人から聞いた』

といふやうな實例を誠しやかに辯じ立てました。反駁する者は、決して其んな事は有るべき筈のものではないと云ひ、主張するものは、いよく其れが事實有り得る事で、たとへば居合の上手が切れれば、

切られた人が切られた事を知らないで歩いてゐたといふ實例や、八丁念佛の云はれなどを幾つも説いて、それは要するに剝いて見る動物の精力の強弱のみではなく、その皮を剝ぐものゝ手練と刃物の利鈍によるといふやうな事を述べて決して相下りませんでした。併し、これは兩方共、根據があるやうで無い議論でありました。なせといへば主張する者も書物や又聞を證據として主張するのであるし、反駁するものも常識上其んな事が有り得べきものではないといふ點から反駁するのであります。ドチラも其の事實を目のあたり見たものゝ口から出る議論ではありませんでした。それを聞いてゐた神尾主膳は興味あることに思ひました。成程常識を以てぞふれば、虎や狼にした處で、皮を剝がれて生きて歩けやうとは思ひ設けられぬこと、併し主張するものゝ論から考へると、

常識以上の不思議が必ずしも無い事とは思はれないのであります。そこで神尾主膳は、

『それは近頃面白いお話した、拙者も承はつてゐると、ドチラのお申分にも道理がありさうでもあり、無いやうでもある、それといふのは何れも其の御實驗を御覽なさらぬからの事ぢや、それでは何時まで経つても議論の盡きやう道理はござらぬ、何と其れを一つ實地に驗して御覽あつては如何でござるな』

斯う云ひ出すと、一座は成程と思ひました、成程とは思つたけれど、『實地に驗して見ると云つた處で……』

それは中々容易な實驗ではありません。やはり空想にひとしいものだとあきらめてゐるらしいが、神尾だけは何かの當りがあると覺しく、

『幸、拙者が其の實驗に恰好な犬を一面所持致して居る、その犬は精力飽くまで強く、打ち殺しても死なぬ犬ぢや、時によつては十日や廿日食はずとも意氣の衰へぬ猛犬である、その犬を各方に試験として進上致さう、一つ生皮を剥がして御覽あつては如何でござる』

『それは近頃の慰み……』

と云ふものもありました。餘計な事と眉を擡めるものもありました。言ひ出した神尾が却つて乘氣になつて、

『さうじや、近いうち各々方初め有志のお方に躑躅ヶ崎の拙者屋敷へお集まりを願はう、その庭前に於て右の犬を驗させて御覽に入れたい、これも一つの學問じや』

神尾が進んで其の實驗を主唱して、それが爲に日を期して躑躅ヶ崎

の神尾の屋敷へ多くの人が招かれる事になりました。その集まりの目的は前に云ふ通りの残忍なる遊戯の爲であります。

その残忍なる遊戯に使用さるべき動物は即ちムク犬であつて、その遊戯を實行するのは巨摩郡から雇はれた長吉、長太といふ二人の犬殺しの名人であつて、それを見物するのが主催者の神尾主膳を初め、勤番の上下にわたる有志の者であります。

二人の犬殺しは、その前日來、頻りに犬を手慣らす事に骨を折りました。最初の時にガリ／＼と捧を噛み碎いたゞけで、その後は、やはり眠さうにしてゐるばかりで、別に二人の犬殺しに反抗する模様も見えませんでした。それで犬殺しは安心したけれども、なほ氣に入らない事は、いくら食物を與へても此の犬が其れを欲しがらない事であります。

いろ／＼にして食物を欲しがるやうに仕向けたけれど、これだけは遂に成功しないで其の試験の當日になりました。犬殺し共にも亦大きな責任があります。その皮を剥き損ずるか剥き了せるかによつて議論も定まるし、自分達の腕も定まるのでありました。二人が同時に刀を揮つて、出来得る限りの巧妙と迅速とを盡して、生きながら犬の皮をクル／＼と剥いてしまつて其れでなほ、いくらかの生命を保たせ得るか如何かといふのが其の試験の眼目であります。

六つかしいのは皮を剥く其の事でなく、皮を剥くまでの間、生きて犬を如何して静止とさせて置くかでありました。二人の犬殺しの苦心も亦其處にあつて、いろ／＼に犬を手懐けやうとしたのも其れが爲でありました。併し、見込通り二人の犬殺しに懐いたのか如何か

は、犬を扱ひ慣れた此犬殺し共にもまだ自信がありませんでした。與へる食物は取らないけれど、其の温順であるらしい事が、いくらかの心持みにはなつてゐたのであります。斯うして首へ繩をかけて松の枝へつるし、四本の足へも繩をつけて四方へ張つて置いて身動きの出来ないやうにして置いて、それから仕事にかゝるといふのが順序であつて、それは略見當がついてゐるのであります。神尾の招いた多くの人は、其の當日の定刻に續々と詰かけて來ました。廣間の中や椽のあたりに居溢れて、皆んなの眼は松の木の下、眞黒い動物に注がれてゐます。中には立つて行つて、わざ／＼其の動物の委細を検分してゐるものもありました。

『ありや、もとの支配の邸にゐた犬ではござらぬか』

『うむ』

斯う云つてムク犬を評してゐたものもありましたけれど、元の支配といふことだけすらが此の席では禁句でもあるかのやうに、

『うむ』

と云つて噛み殺すやうに頷いたばかりで、駒井とか能登守とも云うものはありませんでした。況してお君とか米友とか云ふものゝ名は誰の口にも上るではありません。

こゝで驗し物になるべき犬に對しても、多少の同情を持つたものが此の中に無いとは申されません。併し、集まつてゐるものは皆武士でありました。切捨御免を許されてゐる武士達でありました。これ等の人は時としては人命をも刀の試しに供して、其れを當り前だと信じてゐる人でありました。また時としては左様な残忍な行ひもして見なければ、武士の膽力が据はらぬと考へてゐるやうなものもありました。日頃は善良と云はれてゐる人でも残忍な遊戯の前に目をつぶらない事が武士の嗜みの一つだと考へもし、人にも奨勵するやうな人がありました。況んや生きた人命でなく、多寡が一疋の犬だもの。

斯うして遊戯の選手に當るべき犬殺しの來るのを待つてゐる間に、例の長吉、長太の二人の犬殺しが犬潜りから入つて來ました。

生きながら皮を剝かれて其の動物が、なほ生きて動けるか如何かといふやうな議論の非常識であることは申すまでもありません。其れを實行せしめやうとする神尾主膳等の心持も亦人間並の沙汰ではありません。其れを引き受けた犬殺しは、商賣だから論外に置くとしても、彼等は其れを引受けて見事やり了せるつもりで出て來たのかも知らん。やり了せても、やり損なつても武士達の高壓で是非なく

こんな仕事を引受けたものに相違ないのであります。

それだから、彼等には、皮を剥いて、それが生きてゐやうとも死んでしまはうとも、それには責任が無くて、たゞ剥き振の手際の鮮かな處を御覽に入れさへすれば義務が済むものと心得てゐるらしくありました。

犬殺しが入つて來たのを見ると、主人役の神尾主膳を初めとして見物の人は緊張しました。犬殺しは遠くの方から怖るゝ地上へ膝行して集まつた人達を仰ぎ見ることをしないで、犬の方へばかり近寄つて行きましました。

さき程からの物々しい光景を見てゐたムク犬は、今日は、いつものやうに眠さうな眼が漸く冴えて來たやうであります。首を立て、集まつてゐる武士達を、深い眼つきで見つめて居りました。其の有様

は何か事あるのを悟つて、聊か用意する處あるものゝやうにも見えません。

さて、犬殺しが犬潜りから入つて來た時分に、ムク犬の眼が爛としてかゞやきました。

やゝ離れた處へ着いた犬殺しは二人共に籠を其處へ下ろして、籠の中から大きな鎌を取り出して先づ腰にさし、其れから菴を敷いて其の上へ尻を卸ろし、次に籠の中から種々の道具を取り出して道具調べにかゝりました。其の道具といふのは一束の細引と、鐵製の環と大小幾通りの庖丁と小刀と小さな鋸などの類でありました。

『長太、如何もあの鐵の鎖が邪魔になつて仕方が無えな』
長吉は犬を見ながら斯う云つて長太を顧みると、長太は尤もといふ面をして、

「さうだ、あの鎖を外してかゝらなけりやあ思う様にはやれねえ」
 二人は今に至つても、まだムク犬の首に捲きつけられた二重三重の
 鐵の鎖を問題にしてゐるのであります。實際、あの鎖があつては、
 皮を剥ぎにかゝる時に、ドノ位邪魔になるかといふことは素人目にも
 想像される事です。

「だから、おれは、あいつを外してしまつて其の代りに此の環を首
 へはめて、細引で松の枝へ吊るして置いて仕事にかゝりてえと思
 うのだ」

「けれども、あの位の犬だから細引じやあ六づかしからうと思はれ
 るせ」

「ナーニ、大丈夫だ、こいつを二重にして引括れば何の事はあるも
 のか」

「じやあ、さういふ事にしやう、一番先に口環を穿めるんだな、口
 環」

用意して來た革製の口輪を取つて二人が、やがてムク犬の方へ近寄
 りました。

今まで伏してゐたムク犬が此の時に立ち上りました。

「やい畜生、温順しく往生しろよ」

二人の犬殺しは尋常の犬殺しにかかるつもりで、左右から歩み寄つ
 て、一人は例の握飯を投げて、一人は投網を構へるやうに口輪を擴
 げて、

「其れ、こん畜生、口を此方へ出せ」

呼吸を計つて兩方から、ムク犬を伸伏るやうにして口輪を穿めやう
 とすると、ムク犬は猛然として其瘦せた身體を左右に振りました。

「危ねえ、こん畜生」

二人の犬殺しは其の勢に狼狽したが、

「こいつは可けねえ、どうしても首を松の木へ吊り下げて置いてからで無えと」

二人の犬殺しは、手際よく口輪を穿めてしまつつもりであつた處が意外の手強さに、やゝ當が外れて、先づ如何しても松の枝へ繩をかけて首を或る程度まで締め上げて置いてから仕事にかゝらねばならぬと覺りました。

麻繩の細引へ輪をこしらへ、それをムク犬の首へ投げかける事、それは近寄つて口輪を穿めることよりも遙に容易い仕事でもあり、自分の熟練を持つて居りました。

難なくムク犬の首を麻繩で括つて其れを松の枝へ引き通して、悠々

と引き上げにかゝりました。けれども、不幸にして最初から捲いてあつた二重三重の鐵の鎖が取れてゐないのだから、或る程度までしか引き上げる事は出来ませんでした。

彼等の目的は、斯うして首を絞めてしまはない程度に於て、後足で直立するほどに犬の首を引き上げて、前へ廻つて腹を見られる位にして置いて仕事にかゝらうといふのであります。

すでに首へ繩を捲きつけて、その繩を松の枝から通してしまつた以上は、さながらムク犬の身體は起重機にかけられたと同じことでもあります。若干の力で繩の一端を引張りさへすれば、ムク犬は腹を前にして前足を宙に上げるやうな仕掛けにされてしまひました。

たゞ例の鎖が捲きつけてあるが爲めに、或る程度より上へは浮かないから、折角捲きつけた首の繩もムク犬には更に苦痛を覺えないの

であります。だから、次の仕事は如何しても其の鐵の鎖を取り外す事
 事ことでなければなりません。

「なか／＼大した鎖だ、合鍵がお借り申してあるから、これで錠前
 を外すがいゝ、それ、細引はよく松の樹へ捲きつけて置かねえど、
 鎖を外す拍子に繩がゆるむと間違へが出来るだ」
 周到な用心と警戒の下に鎖を外しにかゝりました。

此の前後の間に於けるムク犬の身體には、更に隙がありませんでし
 た。四つの足は合掌杵のやうに剛く突つ張つて、其の眼は間斷なく
 犬殺し共の舉動を見まはして、其の口から漸く唸りを立てはじめて
 りました。瘦た身體がブル／＼と身震ひをはじめました。

廣間と椽側とで見物してゐた武士の連中は、片唾を呑みはじめまし
 た。犬殺しは口頃の技倆を手際よく見せやうといふ心であります。

武士達は、前代にもあまり例の少い生きたもの、皮剥ぎを興味を以
 て見物しやうといふのであります。穢多非人の階級は、頼まれれば
 生きた人間の磔刑をさへ請負うのであるから、犬なんぞは朝飯前の
 ものであります。また武士達とても、同じ人間を斬捨ることを商賣
 にしてゐた時代もあるのだから、多寡が生きた犬の皮剥ぎを實地に
 御覽になるといふことも、其んなに良心には抵觸しないで却て残忍
 性の快樂をそゝる位のものであります。

若し、犬の代りに生きた人間を使用する事が出来たならば、此處に
 集まる武士達のうちの幾人かは、もつと痛快味を刺戟されたかも知
 れません。さすがに其れは出来ないので、猛犬を以て甘んずるとい
 ふやうな種類もあつたであります。

犬の首から松の枝へかけた細引を、しかと松の大木の幹へグル／＼

と絡げて置いてから、二人の犬殺しは、ムク犬の首に二重三重に繋がれた鐵の鎖を解きにかゝりました。大象の力を以てしても断ち切ることの出来ない鎖も、錠前を以てすれば軽々と外す事が出来るのであります。

「それ」

長太が外した鎖をガチャリと投げ出した途端に、ムク犬が山の崩れるやうに吠え出しました。

「失敗つた！」

細引を手に持つてゐた長吉が絶望に近い叫びを立てました。

「失敗つた！」

長吉が絶望的の叫びを爲した時に、ズル／＼と其の手に持つてゐた細引に引摺られて行きさす。

「此奴は堪らぬへ」

長太は狼狽して長吉の引摺られて行く細引に取りつきました。

これは本當に思ひ設けぬ大變でありました。鎖を外した瞬間に聰明なるムク犬は全身の力を集めて前へ飛び出しました。繩は松ヶ枝から幹をズル／＼と這つて、それを結び直す隙を與へませんでした。繩にすがりついた長吉は、これも全身の力を注いで引き留めやうとしたけれど、力に餘つてズル／＼と引摺られた上に横倒しになりました。それに力を合せやうと周章た長太も諸共に引摺られて横倒しになりました。

前へ飛び出したムク犬の首には二人の取りすがつてゐる麻繩と、前から繋いであつた其れが、たつた今解かれた鐵の鎖とが食つてゐます。

麻の繩に取りすがる長吉、長太の二人と鐵の鎖とを引摺つて、ムク犬は口の裂けるやうな叫びと唸りとを立てました。

「驚破！」

と廣間と椽側とに集まつて此の場の體を見物してゐた武士達も、此の時に思はず動揺めきました。

一旦、麻繩に取りついて横倒しになつた長太は直ぐに起き上がりました。長吉は尙ほ必死と其の繩にすがりついて引摺られて行きました。起き上がった長太は、其處へ並べてあつた棍棒を取り上げてムク犬の前に迫りました。

「こん畜生！」

長太は其の棍棒を振りかざして無二無三にムク犬に打つてかゝる。長吉は、なほ一生懸命に繩に取りついてゐる。繩に取りついてゐる

長吉を引摺りながら、前から棒で打つてかゝつた長太に向つて、烈しき怒りと共に、ムク犬は嚇と大口を開きました。

「畜生、畜生、畜生」

たしかに、やり損なつた長太は夢中になつて棍棒を振り上げてムク犬を滅多打に打ちかゝりました。けれども其の棒はムク犬の急處に當る事が無く、滅多打にのぼせてゐる長太の咽喉の横からガブリとムク犬が其の巨口を一つ當てました。

「呀！」

長太は棒を投げ出して仰向けに倒れる時に、ムク犬は倒れた長太の身體を乗越えて前へ出ました。繩にすがつてゐた長太は手球のやうに其れについて引摺られました。

「長太、如何した」

「長吉、放すな」

長太はいよ／＼血迷つて、噛まれて倒れながらムク犬の身體に抱つきました。長吉が引摺られながらも繩を放さないで苦しがつてゐるのも、長太が半死半生になりつゝも、此の際猛犬の身體に、噛ぢりつかうとするのも、もう周章狼狽の極でありますけれど、一つには彼等は斯うして身を以てしても、猛犬を引き留めなければならぬのであります。

自分達の手抜かりから猛獸の絆を絶つてしまつた事は、申譯のない失敗だけれど、それよりも此の死者狂ひの猛犬が、あのお歴々のお出でになる處へ飛び込みでもしやうものならば、何ともかとも云ひ難き椿事を引き起すのであります。

だから彼等としても周章狼狽の極にありながら、身が粉になるまで

も其責任に當らねばならぬ自覺に動かされない譯には行きませぬ。けれども其れは無益でありました。抱ついた長太は一堪まりもなく振飛ばされ、引摺られた長吉は二三間劄飛ばされました。

事體穩やかならずと見て取つた見物の武士達は總立です。さすがに女子供では無かつたから、犬が狂ひ出したといふて逃げ迷うものはありませんでしたけれど、事の體に安からず思つて立ち上がりました。

二人の犬殺しを振り飛ばしたムク犬は、一散に走らうとして——其の逃げ場を見廻したものの、やうでしたけれど、何れの口も固められて逃れ出でんとする處のないのを見て、烈しい唸り聲と共に兩足を揃えて暫らく立つてゐました。

「こん畜生」

二人の犬殺しは、いよく血迷うて、手にく腰に差してゐた大きな犬鎌を抜いて打ち振りました。噛まれた創や摺創で血塗れになりつゝ、當途もなく犬鎌を振り廻して騒ぎ立つ有様は、犬よりは人の方が狂ひ出したやうであります。

この時、神尾主膳は――廢せば宜かつたのですけれども、來客の手前と、例の通り酒氣を帯てゐたのだから嚇と怒つて、眞先に自分が長押から九尺柄の槍を押し取りました。自身手を下すまでの事も無からうに憤怒の餘り、神尾主膳は九尺柄の槍の鞘を拂うと共に、椽の上からヒワリと庭へ飛び下りました。

「神尾殿お危なうござる」

皆が留めたけれども主膳は留まりませんでした。流々と其の槍をしごいて、今身震ひして立ち迷うてゐるムク犬の前に風を切つて其の槍を突き出しました。

神尾主膳と雖も武術には、また一通りの手腕のあるものであります。怒りに乗じて突き出す槍が可なり鋭いものであることは申すまでもありません。

ムク犬は後へ退つて其の槍の鋒先を避けました。勢込んだ神屋主膳は逃さじと其れを突掛けました。

酒の勢を假る主膳の勇氣は、一座のお客を歎賞せしめるよりも寧ろ其の無謀に驚かせました。然し、主人が斯うして出たのに、客も黙つて引込んでゐられないのであります。是非なく刀を押し取つて主膳の後、或は其の左右から應援に出かけました。鎗槍を借りて横合より突かける者もありました。

ムクが主膳の槍先を避けたのは、或は此の家の主人に遠慮をして避

けたのかも知れませんが。好んで人に喰ひつくものでない事を示す爲に、最初然るべき逃げ場を求めてゐたのかも知れませんが。併し、斯うなつて見てはムクとして、自分の生存の爲にも立つて戦はなければなりません。其の武士であると犬殺しである事に論無く、牙に當る限りは噛み散らし、頭を觸るゝ限りは噛み砕いても此の場を逃れるより外はないのであります。

今、猛然と突き出した神尾主膳の槍をムク犬はスウツと潜りました。その首には前のやうに鐵の鎖と麻繩とをひいたまゝで、槍の上からムク犬は一足飛びに神尾主膳の頭の上まで飛びました。

『小癩な！』

主膳は槍を手許につめて身を沈ませて上から飛ひかゝるムク犬を下から突き立てやうとしました。その隙を與えることなく、ムク犬は

ガブリと神尾主膳の左の肩先へ食ひつき

『呀ッ』

神尾は槍を持つたまゝ後へ倒れるのを、それと云つて應援の者が、ムク犬に槍を突掛けました。ムクは轉じて其の槍をまた乗越えしました。ムク犬は單に勇猛なる犬であつたのみならず、女輕業の一座に仕込まれた爲に、比類なき身の輕さを持つてゐました。さうしてヒラヒラりと人の頭の上を飛ぶことは、多くの敵手を惱ます事に於て有利な戦法であります。

それより以後に於けるムク犬の荒れ方は縦横無盡といふものでありました。

武士と云はず犬殺しと云はず、其の人の頭を飛び越して遂に座敷の中へ亂入してしまひました。亂入したのではなく、ムクとしては、や

はり其の逃げ場を求むる爲に心ならずも人間の住む疊の上まで上つてしまつたものであります。

家の中へ、犬を追入れた時は、たしかに犬に取つては、いよく有利で、人間に取つては、なか／＼不利益でありました。單身にして身の軽い犬は間毎々々を飛び廻るのに自由でありました。槍を持つたり刀を持つたり棒を持つたりして追廻す人間は家の中に於ての働きが不自由でありました。

彼處へ行つた、此方へ来た、それ裏へ出た、表へ廻つた、椽の下へ潜つた、物置へ隠れたと云つて騒いでゐるうちに、其の何れの口から逃げ去つたか知れないが、屋敷の中の湧き返るやうな騒ぎを後にして、ムク犬の姿は此の屋敷の何れの場所からか逃げ出してしまつたものであります。

山へ逃げた、林へ隠れた、畑にゐたと、家の中の騒ぎが外へ出た時分には、ムク犬は其の何れの場所にも居ませんでした。此の催しの爲には散々の失敗であつたけれども、ムク犬の爲には意外の幸でありました。少くとも此の場で残忍な試験に供せらるゝだけの憂目は免れることを得て何れへか逃げ去りました。併し、斯うなつて見ると、これから後、何處までムク犬が逃げ了せられるか、どうかは疑問であります。武家屋敷の召仕へや附近の百姓等は總出で、狂犬のあとを追ふべく、山や林や畑から卷狩のやうな陣立をととのへたのは、それから長い後の事ではありませんでした。左の肩先を犬に噛まれた神尾主膳は——一時それが爲に倒れて氣絶したやうに見えました。駈寄つて介抱したものの、爲に直に正氣はつきまじたけれど、其れが爲に主膳の怒りは頂上に達しました。

「穢多、非人共」

威丈高になつて、今しも、ムク犬を追つて、外へ出やうとする犬殺しを呼び留めました。

「へい〜」

犬殺し共は、へたく〜と其處へ跪まりました。

「貴様達は言語道斷の奴等だ、このザマは何事だ」

「誠に申譯がござりませぬ、溫和しさうな犬でございましたから決して此んな事は無からうと思ひまして」

「黙れ！馬鹿者」

主膳は肩先に療治を受けて布を捲いてもらひながら、其の沸え立つやうな憤懣を、犬殺し共の頭から浴びせかけました。犬殺し共は恐れ入つて顔の色はありませぬ。

「元はと云へば貴様達の未熟だ、犬にも劣つた畜生奴、如何して呉れう」

神尾主膳の眼にキラ〜と黄色い色が見えたかと思ふと、矢庭に其の突いてゐた槍を取り直し。

「馬鹿奴！」

恐れ入つてゐた長太を覘つて、胸許からグサと其の槍を突き通しました。

「苦！殿様！」

長太は、のたうち廻つて苦しみました。その手には胸許を突き貫かれた槍の柄をしかと握り、

「殿様、あんまり……そりや」

と云つて、あさは云へないで七轉八倒の苦しみであります。

「殿様、そりや、あんまりお情けなうございます」
長太の云へない處を長吉が引き取つて、眼の色を變へ犬鏢を持つて立ち上がる處を、

「汝れも！」

と云つて長太の胸から抜いた槍で、またも長吉の胸をグサと一突。

神尾の下屋敷から脱する事を得たムク犬は、山へも逃げず里へも逃げず、首に鎖と繩を引張つたまゝで只走りに走つて鹽山の惠林寺の前へ來ると、直に其の門内へ飛び込んでしまひました。山へも里へも入らなかつた此の犬が何の心あつて寺へ入つたか、犬の心持を知ることには出来ません。

街道でも門外でも騒いだやうに、惠林寺の門内へ此の珍客が案内もなく飛び込んだ時には一山の大衆を騒がせました。

「ソレ狂犬だ！」

庭を掃いてゐた坊主は箒を振り上げました。味噌を摺つてゐた納所は摺古木を擔ぎ出しました。その他いろいろの獲物を持つて此のさまざまい風來犬を追ひ立てました。門外へ追ひ出さうとして却て方丈へ追ひ込んでしまひました。

一山の大衆は面白半分に此の犬を追廻すのであります。追はれるムク犬は敢て其れに向はうともしない、寧ろ哀れみを乞ふやうにして逃げるのを、大衆は盛んに追かけて、彼方へ行つた此方へ來たと騒ぎ立つてゐました。

例の慢心和尙は此の時、點心でありました。膳に向つて糊のやうなお粥のやうなものを一心に食べてゐました。その食事の鼻先へムク

犬が呷ぎく逃げ込んで来ました。

「そーれ、其方へ行つた」

「やーれ、此方へ行つた」

第坊主や味噌摺坊主は、いよく面白がつて此處まで追ひ詰めて来ました。

「何だく、やかましい」

慢心和尚は大きな聲で右の坊主共を嗜めました。

「和尚様、狂犬が飛び込みましたせ、西の方から牢破りをして逃げた狂犬ですせ、それが今此のお寺の中へ逃げ込んでしまひました、だから斯うして追ひ飛ばしてゐるのでございます」

「餘計な事をするな、そんな事をする暇に味噌でも摺れ」

慢心和尚は群がつてゐる大坊主や小坊主を叱り飛ばして。

「クロか、クロか、さあ来い来い」

と云つて手招きました。

人に狎れることの少いムク犬が、招かれた慢心和尚の面を凝と見つめながら尾を振つて其處へキチンと跪まりました。

「狂犬であるか、狂犬で無いか、眼つきを見れば直ぐわかるぢや、

この犬を狂犬と見る貴様達の方に餘つばごヤマしい處がある」

慢心和尚は此んな苦しい洒落を云ひながら、今食べてしまつた黒塗のお椀を取つて傍にゐた給仕の小坊主に、

「もう一杯」

と云つてお盆の上へ其のお椀を載せました。小坊主が心得て、今食たと同じやうなお粥のやうな糊のやうなものを其のお椀に一杯よそつて來ると。

「南無黒犬大明神」

と云つて推しいたゞいて恭しく座を立つてムク犬の前へ自身に持つて來ました。

其のお椀を目八分に捧げて推し戴いて持つて來る有様といふものが馬鹿町噺で見て居られるものではありません。

「南無黒犬大明神様、何もございませぬが此れを召上がつて暫時のお凌ぎを遊ばされませう」

椀の處へさし置いて犬に向つて三拜する有様といふものは正氣の沙汰ではありません。

併し乍ら、不思議な事は、神尾の下屋敷で何を與へられても口を觸れることだにしなかつたムク犬が、此の一椀のお粥とも糊ともつかぬものを初對面の慢心和尚から捧げられると、さも嬉しげに舌を鳴

らして食べはじめた事であります。

九

これより先、浪人達に怨まれて首を兩國橋に梟された本所の相生町の箱屋惣兵衛の家が何者かによつて買取られて、新たに修葺を加へられて別のものゝやうになりました。

この家は主人の箱惣殺されて以來一家は四散し、親戚の者も天誅を怖れて近寄るものがありませんでしたから、町内で保管し、一時は宇治山田の米友が、その番人に頼まれて槍を揮つて怪しい浪人を追つた事などもありました。

この家は何者によつて買ひ取られたか知れないが持主が代り修理が

加へられると共に、そこに出入するのは異種異様の人であることが多少近所のものゝ眼を引きました。身分あるらしい武士であり、或は大名の奥に仕へるらしい女中であり、或はまた諸國の商人のやうなものまで集まりました。女房子供の類は一つも見えないで、これが主人と見えるのは額に波を打つ大白髪の老女でありました。この老女は、氣輕に折々は一人で外出することもあり、また若い女中をつれて外出することもあり、物々しく乗物で乗出す事もありません。たしかに武家出の人であつて、一見して女丈夫とも思はれる位の權の高い老女であります。此の老女の家には前に云ふ通り絶えず食客がりました。その食客はまた武士であり、商人風の者であり、或ひは労働者らしい身なりの者などもありました。けれど老女は來る者を拒むことなく、悉く

く自分の子供であるかの如く、其の廣い家を開放して彼等の出入の自由に任せ、その窮した者には小遣錢までも與へてやつてゐるやうです。

食客連は、また己れが屋敷に歸つたやうな氣取で、或ひは黙々として勘考をしてゐるものもあれば、或ひは寄集まつて腕を扼しながら當世の事を論じて夜を明かすものもありました。老女に取つては其れが大機嫌であるらしく、食客連の間で議論が決しない時は、老女の處へ持つて出て裁判を乞ふ様な事もありました。

こんなにも多くの食客を絶えず世話してゐる老女の手許には、別に幾人かの女中や下働きが置いてありました。併し、その男女間の別は可なり嚴しいもので、食客連の放言高談には寛大である老女も

それと女中部屋との交渉は鐵の關を置いて、何人をも一步も其の境を犯すことのないやうにしてあることもわかります。

此の老女が何者であらうといふことが漸く近所から町内の評判になる前に、其の筋の注意を惹かないわけには行きません。

けれども、その筋に於ても一應内偵しての上、如何したものか急に手を引いてしまつたらしいやうであります。

こゝに於て、老女の身邊には幾多の臆測が加はりました。誰いふとなく、こんな事を云ふものがあります。

十三代の將軍温恭院殿(家定)の御臺所は薩摩の島津齊彬の娘さんであります。お興入があつてから僅三年に満たないうちに將軍が亡く

なりました。廿四年の年に後家さんになつた將軍の御臺所が即ち天璋院であります。天璋院殿は島津の息女であつたけれども、近衛家の

養女として將軍家定に縁附いたものだといふことであります。この老女は其の天璋院殿の爲に薩摩から特に選ばれて附けられた人であるといふのが一説であります。

その説によると、此の老女の背後には將軍の御臺所の權威と、大々名の薩摩の勢力とが加へられてある譯であります。だから其處へ出入する浪士體の者の中には薩摩辯の者が多く、さうでないにしても九州言葉の者が多いのが何よりの證據だといふ事があります。それで此の老女は薩摩の家老の母親で、天璋院殿の爲には外ながら後見の地位に居り、やゝもすれば暗雲の蟠る大奥の勢力争ひを、こゝに離れて見張つてゐるのだといふ事があります。將軍の御臺所も薩摩の殿様でさへも一目置く位の權威があるのだから、此處へ出入する武士共を子供扱にするのは無理のない事だといふやうな説も

ある。成程と聞けるのでありました。

もう一つの説は斯うであります。

十三代の將軍が、わずかに卅五歳で亡くなつた後に幕府では例の繼嗣問題で騒ぎました。その揚句に紀州から迎へられたのが十四代の將軍照徳院殿(家茂)であります。この家茂に降嫁された夫人が即ち和宮であります。和宮は時の帝孝明天皇の御妹であらせられました。それが京都と關東との御仲の御合體の爲にとて御降嫁になつた事は其の時代に於て此の上もなき大慶の事とされて居りました。疑問の老女は和宮様の爲に公家から附けられた重い役目の人であるといふのも成程と聞かれる説でありました。若しさうとすれば此れは前の説よりも一層威權を加へた後光であります。それを知つて其の筋が内偵の手を引いたのも尤もと領される次第でありました。

こんな風に後光の射すほど、老女の隠れた勢力を信用してゐるものもあれば、また一説には、ナニあれば其んな混み入つた威權を笠に來てゐる女ではない、單に一種の女丈夫であるに過ぎない。たとへば筑前の野村望東尼といつたやうな質の女で、生來あつた氣象の下に志士達の世話をしたがり、其の徳で、諸藩の内から少からぬ給與を贈るものがあり、志士連も亦此の家を最もよき避難所としてゐるに過ぎないといふ説も成る程と聞かれるにはありません。いづれにしても此の老女が只者でないといふことゝ、只者でないながら、斯うして通して行ける徳望は認めなければならぬのであります。俠氣、膽力、度量、寧ろ女性には有らずもがなの諸徳を此の老女は多分に持つてゐるには違ひありません。別にこの老女が愛して手許から離さぬ一人の若い娘がありました。

これは疑問も分解も試むる必要がなく、甲州から男装して逃げて来た松女であります。老女が外出する時も、其のお伴をして行くのは大抵は松女でありました。

甲州街道でお松の危難を助けて江戸へ下つた南條なにがしも亦、此の老女の許へ出入する武士のうちの重なる一人でありました。

南條なにがしはお松を助けて江戸へ出て、それから此の老女にお松の身を托したといふことは自ら明らかになつて来る筋道であります。

或日南條なにがしは不意に一人の人をつれて此の家を訪れ、老女の傍にゐたお松を顧みて、

「お松どの、珍しい人にお引合せ申さう、奢らなくては可かん」と冗戯を云ひながら、

「宇津木」

と呼びました。次の間にゐた兵馬が何気なく此の座敷へ通つて先づ驚いたのは、其處にお松のゐる事でありました。お松も亦一見して其の驚きと喜びとは想像に餘りあることでありました。

「まあ、兵馬さん」

甲州以來その消息を知ることの出来なかつた二人が、こゝで思ひがけなく面を合せるといふことは全く夢のやうな事でありました。

「いや、これには一場の物語がある、君に事實を知らせずに連れて来たのは罪のやうだけれど、底を割らぬうちが一興じやと思ふて斯うして連れて来た、お松どのを御老女の手許までお世話を頼んだのは拙者の計らひ、その顛末は、ゆつくりとお松どのの口から聞いたが宜い、今宵は常家へ御厄介になつては如何ぢや、拙者も嘗分此家

へ居候をするつもりだ」

そこでお松は兵馬を別間へ案内して其れから一別以來の事を洩れなく語つて、泣いたり笑つたりするやうな水入らずの話に打ち解けることが出来たのは、全く夢に夢見るやうな嬉しさでありました。

斯うして二人は無事を喜び合つた後に、さし當つて兵馬の思案に餘るお君の身の上の事に話が廻つて行くのは自然の筋道です。

甲府に於ける駒井能登守の失脚をよく知つてゐるお松には、一層お君の身が心配で堪まりませんでした。何してもそれが無事で此の近い處へ来て兵馬に保護されてゐるといふことは、死んだ姉妹が甦へつた知らせを聞くのと同じやうな心持であります。

さうして二人が思案を疑らすまでもなく、今のお君の身の上を當家の老女にお頼みするのが何よりも策の得たものと考へついたのである。

人一緒でした。

兵馬は漸くに重荷を卸した思ひをしました。お松の話聞いて見れば、若い女を預けて少しも心置きのないのは實に此の老女である。求めて探しても斯様な親船は無からうのに、偶然それを發見し得た事の仕合せを兵馬は雀躍して欣ばないわけにはゆきません。

その夜は南條と共に此の家に枕を並べて寝ね、翌朝早々に兵馬は王子へ歸りました。歸つて見ればあの事件。

併し、幸ひにお君の身の上は無事で、兵馬と共に扇屋を引拂つて落着いた處が此の家であることは申すまでもありません。

ここに例の長者町の道庵先生に就て悲しむべき報道を齎さねばなりません。

それは他ならぬ道庵先生が不憫な事に、其の筋から手錠卅日間といふお灸を据ゑられて屋敷に呻吟してゐるといふ事であります。

道庵どもあるべきものが何故こんな目に逢はされたかといふに、その徑路を一通り聞けば成程と思はれない事もあります。

道庵の罪は單に鱈八に反抗したといふだけではありませんでした。鱈八に反抗したといふ事だけでは決して罪になるものではありません。

ん。たゞ其の反抗の手段が聊か常軌を失したとけに其の筋でも、もうも見逃し難くなつたものと見なければなりません。

道庵先生の隣に鱈八大盡の妾宅があることは、廻り合せとは云ひながら如何しても一種の皮肉な社會現象であると思なければなりません。

それ。それで道庵が兄哥連を狩催して馬鹿囃子をはじめると、大盡の方では絶世の美人を集めたり、朝鮮の芝居を打つたりして人氣を取るのであります。

併し乍ら道庵の方は何を云ふにも十八文の貧乏醫者であります。鱈八の方は殆ど無限の金力を持つてゐるのだから、やゝもすれば壓倒され氣味であることは、道庵に取つて非常に同情をせねばならぬ事

であります。

また、一方では大盡のお附の者共が、盛んに手を廻して、道庵のあ

たり近所家屋敷を買ひつぶすのであります。そうして其れをドシド

シ庭にしたり御殿にしたりして今は道庵の屋敷は三方から其の土木の建築に取り圍まれて晝猶暗き有様となつてしまひました。この頃では道庵は毎日々々屋根の檜の上へ上つて其の有様を見て腹を立ててゐました。そのうちにも何か然るべき方案を考へて朝鮮芝居以來の鬱憤を晴らしてやらうと、寝た間もそれを忘れる事ではありませんでした。

勝ち誇つた鱈八側では、これであの貧乏醫者を回ましたと思つて一同が溜飲を下げて當り祝ひなどをして、その後は暫らく表立つた張合がありませんでした。鱈八の方は其れで道庵が全く閉口したものと思ひ、事實に於て敵が降参してしまつた以上は、それを追究がましい事をするのは大人氣ないと思つてそのまゝにし、近所へは甘酒だの餅だのを澤山に配り物をしましたから、さすがは大盡だといつ

て、住宅を買ひつぷぶされた人達も、あまり悪い心持をしませんでした。すべてに於て大盡側のする事は人氣を取るのが上手でありました。

焉んぞ知らん。この間にあつて道庵先生は臥薪嘗膽の思ひして復讐の苦心をしてゐたのであります。

夜なく例の檜へ上つては、ひそかに天文を考へ地の理を吟味して再舉の計畫が、おさく／＼怠りがありませんでした。

それとは知らず鱈八大盡の此の御殿の上で或る日多くの來客がありました。この來客は決して前のやうな道庵を當つけの會でも何でもなく、ドチラかといへば今までの會合よりは、すつと品もよく珍らしく、しめやかな會合でありました。

そこへ集つた者は皆名うての大盡連で、今日は主人が新たに手に入

れた書齋と茶器との拜見を兼ねての集まりでありました。やはり例の通り高樓を明け放してゐたから、道庵の庭からは來客のすべての面までが見えるのでありました。

何氣なく庭へ出て藥草を乾してゐた道庵が此の體を見るとい

「占めた！」

藥草を抛り出して飛び上がり、

「國公、ならず者を皆んな呼び集めて來い」

と命令しました。

程なく道庵の許へ集まつたのは、ならず者では無く、この近所に住んでゐる道庵の子分連中で、それぞれ相當の職に有りついてゐる人々であります。

主人側では新たに手に入れた名物の自慢をし、來客側では其れに批評を試みたりなごして鱈八御殿の上では興が漸く酩酊にならうとする時に、隣家の道庵先生の屋敷の屋根上が遽に物騒がしくなりました。

主客一同が何事かと思つて屋根の上を見た時分に、何時の間か用意して置いたものが、例の馬鹿騷子以來の櫓の上に、夥しい水鐵砲が筒口を揃へて一様に此の御殿の座敷の上へ向けられてありました。

「これは」

と鱈八大盡の主客の面々が驚き呆れて居る處へ、櫓の上では、道庵が大將氣取りでハタキを揮つて、

「ソレ、打て、立打の構」

と號令を下しました。

その號令の下に、道庵の子分連は勢ひ込んで一斉射撃をはじめまし

た。これは豫て充分の用意がしてあつたものと見えて、前々が一齊射撃をはじめると、手桶に水を汲んで井戸から梯子、梯子から屋根と隙間もなく後部輸送がつゞきました。これが爲に前列の水鐵砲は更に彈丸の不足を感じるどいふことがなく、思ひ切つて射撃をつゞける事が出来ました。水は宛然吐龍の如き勢で鮎八御殿の廣間の上へ走るのではありません。

これは實に意外の狼籍でありました。折角極めて上品に集まつた品評の會が、頭から斯うして水を打かけられてしまひました。主客の狼狽は譬うるに物が無いのであります。ツブ濡れになつて疊の上を這つたり泳いだりしました。驚きは大きいけれども、水の事だから濡れる丈で別段に怪我は無い筈であつたけれども、あまりに驚いてしまつたものだから、中には腰を抜かして疊の上の同じ處を幾度も

も幾度も這つたり泳いだりしてゐるものもありました。水が胸に這つたのを、ほんとうに實彈射撃で胸を打ち抜かれたと思つてグンニヤリしてしまつたものもありました。斯うして命辛々で這つたり泳いだりしてゐる位だから、さしも自慢にしてゐた名物の書畫も骨董も顧みる暇はなく、思う存分に水をかけられて轉がり廻つてをりました。

此の體を見た道庵先生は躍り上がつて悦びました。

「者共出來した、この圖を抜かさず打てや打て打て」

盛んにハタキを振り廻して號令を下すものだから、道庵の子分の者共もいよ／＼面白がつて水鐵砲を弾き立てました。彈藥に不足は無かつたけれど、そのうちに鮎八の方では雇人達が惣出になつて雨戸をハタ／＼と締さり（中には、あはてて雨戸と雨戸の間へ首を挟ま

れる者もあつたり、それで道庵軍は充分に勝ち誇つて水鏡砲を納める事になりました。

この時の道庵の勢といふものは傍へも寄りつけないほどの勢でありました。すつかり凱旋將軍の氣取になつてしまつて、

「謀は密なるを貴ぶとはこの事だ、孔明や楠だからと云つて、何も其んなに他人がましくするには及ばねへ、さあ、ならず者、これから大に師を犒らつてやるから庭へ下りろ」

と云つて自分が先に立つて軍を引上げて、罎の干物や何かで盛んに子分達に飲ませました。

子分達も亦親分の計略が奇功を奏したのは自分達の手柄も同じであるといつて、盛んに飲みはじめました。道庵は、かねての鬱憤を晴らしたものだから嬉しくて嬉しくて堪まらないで、一緒になつて飲

み且踊つてゐると其處へ其の筋の役人が出張しました。グデン／＼になつてゐる道庵を引張つて役所へ連れて行つてしまひました。

さすがに大盡家でも、此の度の無茶な狼籍に堪忍がなり難く其の筋へ訴へ出たものと見えます。それが爲めに道庵は役所へ引張られて

一應吟味の上が手錠卅日間といふお灸になつたのは自業自得とはいへ可哀相な事でありました。

手錠卅日は、大した重い刑罰ではありませんでした。道庵は此の頃鱈八を相手に騒いでゐるけれども、大した悪人でないことは其の筋でもよくわかつてゐるのであります。悪人でないのみならず、道庵式の一種の人物であることもよくわかつてゐるから、お役人も、またかといふ心持でゐました。

併し、訴へられて見ると其のまゝにもなりませんから、道庵をつか

まへて来て、ウンと叱り飛ばし、手錠着目の言ひ渡しをして町内預けといふ事になりました。

それで道庵は手錠を穿められて自分の屋敷へ歸つては來たけれど、その時は祝ひ酒が利き過ぎてグデン／＼になつて歸ると、早々手錠を穿められたまゝで寝込んでしまひました。

眼が醒めた時分に起き直らうとして、はじめて自分の手に錠が穿められてあつた事に氣がつき、最初は、

『誰が此んな悪戯をしやがつた』

と訝かりましたが、直ぐに其れと考へついて、

『此奴は堪らねへ』

と叫びました。併し、それでもまだ何だかよく呑込めてゐないらしく、役所へ引張られた事は臆げに覺えてゐるけれども、叱り飛ばさ

れた事なんぞは九つきり忘れてしまつてゐました。男衆の國公から委細の事を聞いて、はじめて成程と思ひ、今更恨めし氣に其の手錠をながめてゐました。

こゝに、また道庵先生の手錠に就て不利益な事が一つありました。手錠といつた處で、大抵の場合に於てはソツと附け屈をしてユルイ手錠を穿てもらつて、家へ歸れば自由に抜き差の出来るやうになつてゐるのが通例でありました。遊びに出たい時は手錠を抜いて置いて自由に遊びに出ることが出来、お呼出しとか、お手先が尋ねて來たとかいふ時に手錠を穿めて見せれば宜かつたものを、先生は酔つてゐた爲に、つい其の手續をする事が無く、役所でも亦何のいたづらか先生の手に、あたり前の固い手錠を穿めて歸したから、極めて融通の利かないものになつてゐました。

其處へ五人組の者が訪ねて来て驚きました。例によつてお役人にソツと頼んで、緩い手錠に取り替へてもらふやうに運動をせやうとするど、本人の道庵先生が頑として頭を振つて。

「俺や、そんな事は嫌ひで、そんなおべつかは、おれの性に合はねへ、これで構はねへから抛つて置いて呉れ」

と主張します。そんな事を云つて正直に三十日間手錠を守つてゐるといふことは、馬鹿々々しいにも程のあつた事だけれど、酔つてゐる上に、頑固を云ひ出すと際限のない先生の事だから、それではと云つて一先づ其まゝにして置くことにしました。

道庵は斯うしてツマらない意地を張つて手錠を穿められたまゝであるが、その不自由な事は譬ふるに物が無いのであります。

こんな事なら五人組の言ふ事を素直に聞いて置けば宜かつたと内心には悔やみながら、それでも人から慰められると、大不平で意地を張つて、ナニ此の位の事が何であるものかと氣焰を吐いて胡魔化してゐました。

さうして意地を張りながら酒を飲むことから飯を食ふことに至るまで、一々國公の世話になる儂劫さは容易なものではありません。當人も困るし病家先の者は尙ほ困つてゐました。

二日経ち三日経つ間に道庵も少しは慣れて来て相變らず手錠のまゝで酒を飲ませてもらひ、其の勢で頻に鱈八の悪口を並べてゐました。

この最中に道庵の許へ珍客が一人飄然としてやつて來ました。珍客とは誰ぞ、宇治山田の米友であります。

此の場合に米友が道庵先生の處へ姿を現したのは、その時を得たも

のか如何かわかりません。然し、訪ねて来たものは如何も仕方が無いのであります、本来ならば與八と一緒に訪ねて来る約束になつてゐたのだから、一人で先がけをして来たものらしくあります。

「今日は」

米友は定まりが悪さうに先生の前へ座りました。この男は片足が悪く、いから跪こまらうとしても旨い具合には跪こまれないから、胡座と跪まるのを折衷したやうな非常に窮屈な座り方です。

「やあ、妙な奴が來やがつた」

道庵先生も亦手錠のまゝの甚だ窮屈な形で米友を頭ごなしに睨みつけました。

「先生、如何も御沙汰をしちやつた」

感心な事に米友は木綿でこそあれ仕立て下ろしの袂のついた着物を着てゐました。これは與八の好意に出でたものでありませう。

こゝで道庵と米友との一別來の問答がありました。道庵は道庵らしく問ひ、米友は米友らしく答へ、可なり珍妙な問答が取り替はされなければ、割合ひに無事でありました。

「友公」實はおれも苛い目に逢つてしまつたよ」

道庵が最後に、道庵らしくもない弱音を吐くので、米友は其れを不思議に思ひました。米友の不思議に思つたのは、それだけではなく、此の話の最中に、いつも道庵が兩手を上げないでゐる格好が變であることから、よく／＼其の手許を見ると、錠前がかゝつて金の輪が穿めてあるらしいから、益それを訝かつて、

「先生、その手はそりや一體、如何したわけなんだ」

と尋ねました。

「これか」

道庵は手錠の穿められた手を高く差上げて米友に示し、待つてゐましたとばかりに舌なめづりをして、

「まあ米友聞いて呉れ」

と前置きをして、それから馬鹿囃子と水鐵砲の事まで滔々と米友に向つて喋つてしまひました。

これは道庵としては慥かに失策でありました。斯ういふ事を生地のまま、で語つて聞かすには慥に相手が悪いのであります。米友のやうな單純な男を前に置いて、斯ういふ煽動的な出来事を語つて聞かすといふ事は、餘程考へねばならぬ事であつたに拘らず、道庵は調子に乗つて却て其の出来事を色をつけたたり艶をつけたりして面白半分

に説き立て、自分は其れが爲に手錠卅日の刑に處せられたに拘らず、鱈八の方は何のお咎めなく大得意で威張つてゐる。癪にさわつて堪らねへといふやうな事を云つて聞かせて、氣の短い米友の心に追々と波を立たせて行きました。

「馬鹿にしてやがら」

米友が斯ういつて憤慨した面つきが可笑しいといつて、道庵はいゝ氣になつてまた焚きつけました。

「全く馬鹿にしてる、おれは貧乏人の味方で、早く云へば今の世の佐倉宗五郎だ、その佐倉宗五郎が此の通り手錠を穿められて、鱈公なんぞは大手を振つて歩いてゐやがる、斯うなつちや此の世の中は聞だ」

道庵先生の宗五郎氣取も可なりいゝ氣なものであつたけれども、

に角、一應の理窟を聞いて見たり、また米友は尾上山の隠れケ岡で命を拾はれて以來、少くとも此の人を大仁者の一人として推服してゐるのだから、いくら金持だといつても、國の爲になる人だからと云つても、ドシ／＼人の住居を買ひつぶして妾宅を取り擴げるなどいふ事を聞くと、其の傍若無人を憎まないわけには行かないのであります。

その翌日、米友は道庵先生の家の屋根の上の櫓へ上つて見ました。或程、話に聞いた通り、道庵の屋敷の後と左右とは目を驚かすばかり新築の家と庭とで圍まれてゐました。何の恨あつての事か知らないが、これでは先生が肝癪を起すのも尤もだと米友にも領かれたのであります。

鱈八といふのは一體何者であらうと米友は其の御殿の方を覗みつけましたけれど、その時は雨戸を締めきつてありました。これはあの時の騒ぎから、兎も角道庵を手錠町内預けまでにしてしまつたのだから、鱈八の方でも寢醒が悪く、多少謹慎してゐるものと思はれます。

米友には敢て金持だからと云つて特に其れを悪むやうな事はありません。また身分の高い人だからと云つて其れを怖れるやうな事もありません。恩も恨みも無い鱈八だけれど、わが恩人である道庵を虐待して手錠にまでしてしまつた鱈八と思へば無暗に悪らしくなつて堪まりませんでした。

道庵が鱈八に楯をつくののは、それは本當に業腹でやつてゐるのだから、または面白半分でやつてゐるのだからかわからないのであります。殊に米友を嗾しかけた事などは、たしかに面白半分といふよりも面白八

分^ぶでやつた事^{こと}に相違^{さうい}ないのを、米友^{よねとも}に至^{いた}ると其^それを其^そのまゝに受取^{うけと}つて、憎^{にく}み出^だした時^{とき}は本當^{ほんたう}に憎^{にく}むのだから困^{こま}ります。

さうして鯨^{くじら}八^{はち}といふ奴^{やつ}の面^{つら}は、ごんな面^{つら}をしてゐるか一^{ひつ}目^めなりとも見てやりたいものだ^よと餘念^{よねん}なく櫓^{やぐら}の上^{うへ}に立^たつてゐると、如何^{どう}した機^{はし}會^あか今^{いま}まで締^{しめ}きつてあつた雨戸^{あまて}がサラリと開^あきました。

米友^{よねとも}はハツと思^{おも}つて其^その戸^この開^あいた處^{ところ}を見^みました。米友^{よねとも}が心^{こころ}で願^{ねが}つてゐる鯨^{くじら}八^{はち}が或^{ある}は幸^{さいはひ}に其^そ處^{ところ}へ面^{かほ}を出^だしたものでないかと思^{おも}ひました。併^{しか}し、それは間違^{まちが}ひであつて、戸^こを開^あけたのは十五六^{じゅうご}にならうといふ可愛^{かあい}い小間使^{こまつかひ}風^{ふう}の子^こでありました。

「おや」

その女^{をんな}の子^こは戸^こを開^あける途端^{とたん}に道庵^{だうあん}の家^{いえ}の屋根^{やね}を見^みて、其^その櫓^{やぐら}の上^{うへ}に立^たつてゐる米友^{よねとも}に眼^めがつきました。米友^{よねとも}が例^{れい}の眼^めを丸^{まる}くして其^そ處^{ところ}に立^たち盡^{つく}してゐるのを見^みた女^{をんな}の子^こは吃驚^{びっくり}して少^{少し}しばかりたぢろぎました。

それから少^{少し}しばかり引^ひき開^あけた戸^この蔭^{かげ}に隠^{かく}れるやうにして、再^{また}び篤^{とく}と米友^{よねとも}の面^{かほ}をながめてゐましたが、

「オホ、、、」

と遽^にに笑^{わら}ひ出^だしました。それは小娘^{こひすめ}が物^{もの}に可^お笑^{かし}がる笑^{わら}ひ方^{かた}で、遂^{つい}に可^お笑^{かし}さに堪^たへられず腹^{はら}を抱^かへて、

「ちよいと、お徳^{とく}さん、來^きて御覽^{ごらん}なさい、早^{はや}く來^きてごらんなさいよ」

「如何^{どう}したの、お鶴^{つる}さん」

「あれ、あそこを御覽^{ごらん}なさい」

「まあ」

「ありや人間^{にんげん}でせうか、猿^{さる}でせうか」

「そりや人間さ」

「あの面を御覧なさい」

「お、怖い」

「でも何處かに可愛い處もあるじやありませんか」

「子供でせうかね」

「何だかお爺さん見たやうな處もあるのね」

「あれお前さん、此方を凝と見てゐるよ、睨めてるんぢやないか」

「怖いね」

「怖かないよ、子供だよ」

小間使が二人寄り三人寄り、外の女中雇人まで追々集まつて米友の面を指して色々の噂をしてゐるのが米友の耳に入りました。

「やい、そこで何か云つてゐるのは俺等の事を云つてゐるのか」

米友はキビくした聲で叫びました。

「それ御覧、お、怖い」

米友に一喝された女中達は怖氣をふるつて雨戸を締きつてしまひました。それが爲に米友も張合が抜けて喧嘩にもならずにしたつたのは幸でありました。

やゝ暫らくして櫓の上から下りて来た米友を道庵は聲高く呼びましたから、米友が行つて見ると、道庵は例の通り手錠のまゝでつく然と坐つてゐましたが、米友に向つて、暇ならば日本橋まで使ひに行つて来て呉れないかといふ事でありました。米友は直ぐに承知をいたしました。そこで道庵の差圖によつて米友は日本橋の本町の薬種問屋へ薬種を仕入れに行くのであります。

仕入れて来るべき薬種の品々を道庵は米友に口うつしにして書かせ

ました。それに要する金銭の上に道庵は若干の小遣ひ錢を米友に與へて、お前も江戸は久しぶりだから其の序に幾らでも見物をして來るが宜いと云ひました。日のあるうちに歸つて來れば宜ろしいから、いこたま道草を食つて來いといふ極めて都合のよい使ひを言ひつけました。

米友は其の使命を承はつて風呂敷包を首根つ子へ結びつけて、仕立下ろしの袂のある棒縞の着物を着て長者町の屋敷を放れました。本來、使ひそのものは附けたりで恩暇を得たやうなものだから、米友は使ひの用向は後廻しにして、歸りがけに本町へ廻つて藥種を仕入れて來やうと斯う思ひました。

何處へ行かうかしら、暇はもらつたけれども米友には、まだ何處へ行かうかといふ當は無いのであります。兎も角、久しぶりで江戸へ出たのだから御無沙汰廻りをして見やうかと思ひましたけれど、それとても米友が面を出さねばならぬ程の義理合のある處は一軒もないのであります。

何心なく歩いて來ると、佐久間町あたりへ出ました。こゝで米友は去年の事、こましやくれた若い主人の忠作の爲に使ひ廻されて、飛び出した事を思ひ出しました。あの時の女主人は甲府へ行つてゐる筈だけれど、あの若いこましやくれた忠作は如何してゐるか、小癩にさわる奴だと今もさう思つて通りました。

やがて昌平橋のあたりへ來ると、例の貧窮組の騒ぎに自分も煙に捲かれて、あどをついて歩いた光景を思ひ出しました。昌平橋も無意味に渡つて、これも何等の目的もなく柳原の土手の方へ向つた時にこゝで變な女に呼び留められた事と、その女が自分の落した財布を

拾つて置いて呉た事を思ひ出しました。

「さうだ、あの女はお蝶と云つたつけ、あれで中々正直な女だ、あの女の親方といふ奴も中々親切な奴で、俺等を暫く世話をして呉れたんだ。あゝして恩になつたり世話になつたりした處へ、江戸へ来て見れば面出しをしねえといふのは義理が悪い、扱今日はこれからあの家へ遊びに行つてやらうか知ら、本所の鐘撞堂で相摸屋といふんだ、よく覚えてらあ」

こゝで米友の心持が漸く定まりました。本所の鐘撞堂の相摸屋といふ夜鷹の親分の許へ米友は御無沙汰に行かうといふ覺悟が定まつたのであります。

手ぶらでも行けないから、何か手土産を持つて行きたいと、米友も相當に義理を考へて、何にしやうかと彼方、此方を見廻しながら歩いてゐるうちに、柳原を通り越して兩國に近い所までやつて来てしまひました。

「兩國！」

と氣がついた米友は、全身から冷汗の湧くやうに思つて身を竦ませました。兩國は米友に取つては、よい記憶のある土地ではないのであります。よい記憶のある土地でない上に、其處へ來るとむら／＼として一種云ふべからざる忌な風に襲はれてしまひました。

兩國に近い處へ來て米友がむら／＼と不快な感に打たれて堪まらなくなつたのは、それは前にも此處で心ならず印度人に假裝して、暫くの間人を欺き自らを欺いた事の記憶を呼び起してその良心に恥しくなつた。其れのみではありません。

此處へ來るとお君の事が思ひ出され、甲州へ置いて來たお君の面影

が強い力で米友の心を押へて来たから、

「うーむ」

と云つて米友は突立つたなりで齒を喰ひ縛りました。

「うーむ」

今は此處へ来て、それが何時もするよりは一層烈しい心持になつて齒を喰ひしばつて唸ると共に身震ひをしました。

「能登守といふ奴が悪いんだ、彼奴がお君を蕩したから、それである女があんな事になつちまつたんだ、御支配が何だい、殿様が何だい」

米友は傍へ聞えるほどの聲で唸りながら獨り言を云つてゐます。

お君の事を思ひ出した時の米友は、同時に必ず能登守を恨むのであります。何も知らないお君を蕩して玩びものにしたのは憎むべき

駒井能登守と思ふのであります。大名とか殿様といふ奴等は、自分の権力や榮耀を肩に着て、いつも若い女の操を弄び、いゝ加減の時分に其れを突き放してしまふものであると米友は今や信じきつてゐるのであります。その毒手にかゝつて甘んじて其の玩び物となつて誇りかほしてゐるお君の愚かさは、思ひ出しても腹立たしくなり蹴倒してやりたいやうに思ふのであります。

斯うして米友はお君の事を思ひ出すと、矢も楯も堪まらぬほどに腹立たしくなるが、その腹立は直ぐに能登守の方へ持つて行つてブツ掛けてしまひます。能登守を憎む心は、すべての大名や殿様といふ種族の亂行を憎む心に滔々と流れ込んで行くのであります。その事を思ひ返すと米友は甲府を立つ時に、何故に駒井能登守を打ち殺して来なかつたかと齒を鳴らして其れを悔やむのであります。能登

守を打ち殺せば其れでお君の眼を醒まさせる事も出来たらうにと思ひ返して地團太を踏むのでありました。

米友の頭では、今でもお君は散々に能登守の玩び物になつて、いい氣になつてゐるものとしか思へないのであります。間の山時代の事なんぞは口に出すのも忌やがつて、天晴のお部屋様氣取りで濟ましてゐることは、思へばく業腹で堪まらないのであります。

短氣ではあつたけれども、曾て僻んではゐなかつた米友の心持が漸く、ちり／＼と呪はれて行く事は、米友に取つて重大なる不幸であると共に、斯様な單純な男を一圖に呪ひの道へ走らせることは、その恨みを受けた者に取つては可なりに危険な事でありました。

米友は其處に突立つて唸り、齒噛みをして獨り言を云つて通る人を不思議がらせ、遂に其の周圍へ一人立ち二人立つやうな有様になつた時に氣がついて、

「覺えてやがれ」

齒を食ひしはつたまゝで、サツサと人混を通り抜けて、他目を振らずに兩國橋を渡つて行く舉動は、可笑しいといふよりは慥に物すさまじい舉動でありました。

「何だ彼奴は」

通りすがる人が、皆振り返つて米友の後を見送るほどに穩かならぬ歩きぶりでありました。

十一

兩國橋を渡りきつた米友は、回向院に突き當つて右へ廻つて豎川通

りへ出ました。それから幾らもない相生町の河岸を二丁目の處、例の箱惣の家の前まで来て見ると、どうやら其の頃とは容子が變つてゐるやうであります。

あの時は祟りがあるの、お化が出るのと云つて誰も住み人の無かつたものが、今は立派に人が住んでゐるらしくあります。それも商人向の造作が直されて、誰か然るべき身分の者の別邸か何かのやうな住居になつてゐました。その他には、あんまり變つた事も無いから米友は其の家の前を素通りをして行つてしまはうとすると、

「あ、おちさんが来たよ、槍の上手なおちさんが来たよ」
 パラ／＼と米友の周圍に集つて来たのは、河岸に遊んでゐた子供連であります。これは米友がこゝに留守居をしてゐた時分の馴染の子供連であります。留守番をしてゐる時分には、米友の周圍がこれ等

の子供連の俱樂部になつたものであります。子供連は思ひがけなくも米友の姿を此處に見出したものだからワイ／＼と集まつて来て、

「おちさん、槍の上手なおちさん、何處へ行つたの」

「うむ、俺等は旅をして来たんだ」

「随分長かつたね、ナゼもつと早く歸らなかつたの」

「向うで忙しかつたんだ」

「もう御用が済んだのかい、またおちさん遊ばうよ」

「うむ」

「おちさんがゐる時分にはね、皆んなして此の家の中へ入つて遊んだんだけど、今は誰も入れなくなつてしまつたよ」

「さうかい」

「おちさんが歸つて来たから、おいら達も此の家の中へ入つて遊ん

でいゝんだらう」

「さうは行かねえ」

「如何して」

「もう此處は俺等の家ぢや無へんだ」

「おちさんの家は何處なの」

「俺等の家か、俺等の家は下谷の方だ」

「遠いんだね、もつと近い處へ越してお出でよ」

「うむ」

「おちさん、槍を持つて來なかつたのかい」

「うむ」

「持つて來れば宜いに、皆んな、此のおちさん知つてるかい、脊が低いけれど槍が上手なんだよ」

「知つてまさあ、家のチャンなんども、そ云つてらあ、槍でもつて

此處の家へ入つた浪人者を追ひ飛ばしたんだね、おちさん」

「うむ」

「豪いね、おちさんは見た處、子供のやうに見えるけれど、あれで子供じやねえんだつて、家のお母アもそ云つてたよ」

「さうだよ、おちさんは脊が低くつて可愛い處があるけれど、あれで年食らひなんだつて、おちさん、幾つなんだい、教へて頂戴よ」

「うむ」

「また、おちさんが槍を持つて、此處の番人に來て呉れるといゝなア、さうすると毎日遊びに來られるんだけれど」

「あたいは、おちさんが來たら槍を教へてもらはうや、さうして槍の名人になりたいなあ」

米友はこれ等の子供連に取り巻かれてワイ／＼云はれてゐました。子供連はよく米友を覚えてゐるし、その親達までが今だに米友の事を評判してゐるのもその言葉によつてうかゞはれるのであります。それだから米友はこれ等の子供連を路傍の人ども思へないでゐると不意に、近い處でけた／＼ましい物音がすると共に、わ／＼と子供の泣く聲です。

「それ、金ちやんちの三ちやんが井戸へ落つこつた！」

「あゝ、金ちやんちの三ちやんが井戸へ落つこつてしまつたア」
 今まで米友を取り巻いてゐた子供連が一度に面の色を變へて叫び出し、河岸に近い處の車井戸の井戸側へ集まりました。

今の物音でも知れるし、子供の泣き聲でもわかる。慥に、たつた今此の井戸の中へ陥つた子供があることは疑ふ餘地がありません。

それを見るや米友は首根つ子に結びつけてゐた風呂敷包を、かなぐり捨て、直に井戸側へ取りつきました。井戸側へ取りついてゐた時は早や其の棒縞の仕立下ろしの着物をも脱ぎ捨て、裸一貫になつてゐました。裸一貫になつたかと思ふと、車井戸の釣繩の一方を飽くまで高く吊るし上げて釣瓶を車へ、しつかりと噛ませて置いて、その繩を傳つて一直線に井戸の底へ下つて行きました。斯うして分けて書くこと、その間に多少の時間があるやうだけれど、其の瞬間の米友の舉動は驚くべき敏捷なものであります。首根つ子へ結びつけてゐた風呂敷包をかなぐり捨てた時は井戸端を覗いた時、井戸端を覗いた時は棒縞の仕立下ろしの着物を脱ぎ捨て、裸一貫になつてゐた時、裸一貫になつてゐた時は釣繩を高く吊るし上げた時、繩を高く吊るし上げた時は、早や眞一文字に井戸の底へ下つて行つた時で

殆んど目にも留まらない早業でありました。

近所の親達が青くなつて井戸側へ駆けつけ、それ梯子よ繩よ、誰か下りろ、彼か下りろと騒いでゐる時に、井戸の底から米友が大きな聲で呼びました。

「大丈夫だ、子供は生きてる生きてる、心配しずに其の繩を手繰つて呉れ」

この聲で初めて誰とも知らず助けに下りてゐる者があるといふ事がわかりました。これで近所の親方もお神さんも總出で、エンヤラヤと井戸繩を手繰り上げると、芝居のセリ出のやうに現れて来たのは五ツばかりになる男の子を小脇にかゝえた米友でありました。その子供は聲を噎らして泣いてゐました。泣いてゐる事が生命が無事であつた事を證據立てるのだから、其の母親らしい女は駆寄つて米友の手から奪ふやうに其の子を抱き上げました。

「三公、まあお前、よく助かつて呉れたねえ、よく助かつて呉れたねへ」

ほんとに仕合せな事には頬の處へ少しばかり瘡が出来たばかりで上手に落ちてゐましたから、多少水は呑んでゐたやうだけれど、見るからに生命の無事は保證されるのであります。

「この井戸へ落ちて、よくまあ助かつてねへ、ほんとに水天宮様の御利益だらう」

附近の親達は其の無事であつた事を賀するやら、自分の子供達が負ない處で遊ぶのを叱るやら、井戸側は丸で鼎の湧くやうな騒ぎになつてしまひました。

「ほんとに此れこそ水天宮様の御利益だ」

好い面の皮なのは米友であります。米友の脊が低いから子供に見誤まつたものか、或は此の驚きに紛れて逆上てしまつたものか、誰一人米友にお禮を云ふことに氣がつかまませんでした。さうして矢鱈に水天宮様ばかりを讃めてゐるのであります。

母親は米友の手から子供を奪つて自分の家へ持つて歸りました。彌次馬は其のあとをついて喧々囂々と騒いでゐます。井戸側の少し離れた處に米友は、たつた一人で手拭ひをもつて身體を拭いてゐましたが、やつぱり誰も御苦勞だとも、大儀だとも云ふものはありませんでした。苦笑ひしながら米友は着物を引かけて帯を結んで、さて、『あつ！』

と云つて、さすがに米友が開いた口が塞がらないのは、首根ツ子へ結ひつけてゐた風呂敷包が、いつの間にか紛失してゐることであり
ます。

風呂敷包が紛失してゐるのみならず、財布に入れて置いた小錢までが見えなくなつてゐました。その風呂敷包には道庵から頼まれた藥を仕入れる爲の金銭が入れてありました。

あまりの事に米友は腹も立てないで、着物を引かけて苦笑ひをしました。

この場合に米友の物を盗み去るのは、火事場泥棒よりもモツト苛いやり方でありました。併し、盗んで行つた奴ども、只路傍に抛り出してあつたから、それを浚つて行つたので、斯ういふ場合に米友の抛り出して置いたものと知つて盗んだのではありますまい。

また、水天宮様ばかりを讃めて米友に一言の挨拶をもしなかつた其の子の親達をはじめ近所の人々とても、決して米友を輕蔑してさう

したわけではなく、驚きと喜びに取り逆上て、ついさうなつてしまつたのであることは疑ひもないのであります。

あれもこれも馬鹿々々しくつて、さすがの米友も腹を立つにも立てられず、喧嘩をしやうにも相手が無く、着物を引かけて帯を結ぶと杖を拾つて此の井戸側を、さつさと立ち去つてしまひました。

米友が立ち去つた時分になつて、井戸に落つこちた子供の親達や其の近所の者が、またゾロ／＼と井戸側へ取つて返しました。

それは漸くの事に米友の恩を思ひ出して、それにお禮を云はなければならぬ事を、見てゐた多くの子供達から教へられたから取つて返したのです。併し、それ等の人達が引返して來た時分には、肝腎の米友はもう井戸の側には居りませんでした。その附近にも其れらしい人の影は見えませんでした。

そこで今度は、それ等の人が開いた口が塞がらないのであります。實に申譯がないと云つて、盛んに愚痴を云つたり子供等を叱つたりしてゐましたが、結局、もと此の箱惣の家に留守番をしてゐて、槍を揮つて侍を追ひ飛ばした事のあるおちさんだといふ事を子供等の口から確めて、改めてお禮に行かなければならないと云つてゐたが、さて今では其の男が何處にゐるのだから子供等の話では一向要領を得ませんでした。

『おちさんは、少しの間、旅をしてゐたんだとさ、さうして今は何でも下谷の方にあると云つたね、政ちゃん』
子供等の米友に就ての知識は、これより以上に出でる事は出来ませんでした。

これより先、この騒ぎを聞きつけて箱惣の家の物見の格子の簾の内

から立つて外を覗いてゐた娘がありました。それは米友が井戸から上がつて、着物を引かけて帯を結んでゐる時分の事でありませう。この娘は、その時はじめて奥の方から出て来て、騒ぎの事は丸きり知りません。如何やら井戸へ人でも落ちたものらしいけれど、その時は井戸側の騒ぎは長屋裏の方へうつて、井戸側には米友一人が向うを向いて帯を締めてゐる丈の事でありましたから、最初は格別氣にも留めないでゐました。そのうちに長屋の方からまたゾロ／＼と人が引返して来ると、井戸側になつた一人で向うを向いて着物を着て帯を締めてゐた小男は、さつさと歩き出してしまひました。その小男が歩き出した途端に、簾の中から見てゐた娘は、

「おや」

と云つて驚きまゝした。再び篤と見直さうとした時に、

「お松様、お松様」

奥の方で呼ぶ聲がします。

「はい」

表へ駈出さうとした娘は奥を振り返りました。この娘は即ちお松であります。

十一

「お君さん」

と云つてお君が疑と物を考へてゐる處へお松が入つて来ました。お君が斯うして遣る瀬ない胸をいだいて物思ひに沈んでゐる時にも、お松は物に屈托しない晴やかな面をして、

「わたしは今、珍らしい人に逢ひました、たしかに左様だらうと思ひますわ」

「それは誰方」

お君も亦お松の晴れやかな調子につり込まれて美しい笑顔を見せました。

「當て、御覽なさい」

「誰でせう」

「お前様の、一番仲のよいお友達」

「わたしの一番仲のよいお友達？」

と云つてお君は美しい眉をひそめました。仲の善いにも悪いにも、このお松を外にしては友達らしい友達を持たぬ自分の身を顧みてお松の云ふことを訝るものゝやうでありました。

「言つてしまひませう、わたしは、たつた今、米友さんに逢ひましたよ」

「あの友さんに」

「はい」

「何處で」

「つい、其處で、この家の直前の井戸の處に立つてゐました」

「あの人が、此處を訪ねて來ましたか、如何して、わたしのゐる事がわかつたのでせう、それでも宜かつた」

お君はホツと安心したやうに息をつきました。それでも宜かつたといふのは、米友が自分を訪ねて此處へ來て呉れたものと信じてゐるらしいのを、お松は寧ろ氣の毒がるやうに、

「でも、ほんとうに、米友さんだか、如何だか知れませんか、

「わたしが見た目では全く、あの人に違ひがありませんでした」

「では、あなたがお取次をして下すつたのではないのでございますか、わたしを訪ねてあの人が来て呉れたといふわけでは無いのですか」

「如何いふつもりですか、さつぱりわかりません、わたしが其れと氣がついた時には、もうあの人は井戸側から見えなくなつてしまつたのでございますもの」

「それで、お前様に、何とも云はずに行つてしまつたのでございませうか」

「わたしの方では、たしかに米友さんに違ひないと思ひましたけれど、向ふでは、わたしの姿さへ見ないで彼方を向いてゐました、はつと思ふ間に何處へ行つてしまつたか、言葉をかけて隙もありませ

んでした」

「まあ、如何したのでせう」

「ほんとに、わたしも訝しいと思ひましたから、若し、何かの見損なひではないかと、あとで外へ出て近所の人に尋ねて見ますと、いよく米友さんに違ひないやうでございますから、どうも合點が行きませんの」

「あの人は、少し氣象が變つてゐるから、何か氣に入らない事があつて行つてしまつたのか知ら、若しや、他人の空似といふものでは無いかしら」

お君は打ち消して見たけれど、どうも打ち消し難い疑ひが深くなりま

す。
お君が此の家に預けられてゐるといふ事は初めのうちは、出入の人

々は誰も知りませんでした。

併し、こゝに永く食客のやうになつてゐる人々の間には、自然にそれが知れないのである筈はありません。それ等の人々の間にお君の事が問題となつて、それとなく用事をかこつけてはお君を垣間見やうとするやうになりました。

食客とは云ひながら、これ等の連中は、皆善き意味での一癖ある連中でしたから、そんなに無作法な振舞はしません。けれども二人三人面を合せると、この話に落ちて行くのは争ひ難いものであります。一體、あれは何者であらうといふ事が問題の中心でありました。

老女の娘であらうといふもの、それは丸きり型が違ふ、老女の娘でもなければ身寄の者でもない、然るべき身分の者の持物であつたのを仔細あつて預かつてゐるのだらうといふことは誰も一致する見當

でありません。

或日、こゝへ二三人づれの浪士體の者がやつて來ました。その中には曾て甲府の獄中にゐた南條と五十嵐との二人の姿を見ることが出來ます。

「あゝ、南條が知つてゐる、あの男を責て見るとわかるだらう」
それで集まつた人々が、

「南條君、君に聞いたらわかるだらうと衆議一決ぢや、あの女は、ありや一體何者だ」

座中の一人が問ひかけました。南條はワザと怖い目をして、
「知らん、拙者は女の事などは一向に知つて居らん」
と首を振りました。

「そりや嘘ぢや、君はたしかに知つてゐる、君が連れて来て老女殿に預けたものと一同が認定してゐる」

「詰まらん認定をしたものじや」

「さう云はずに白状したが宜ろしい、情状は可なりに酌量してやる」

「白状するもせんも無い、何處にどんな女がどうしてござるか拙者共は一向に不案内、各々から承はりたい位じや」

「此奴、一筋縄では可かぬ、拷問にかけろ」

「たとへ拷問にかけられても知らぬ、存せぬ」

こんな事を云つて彼等は大きな聲で笑ひました。大きな聲で笑つたけれど、更に要領を得ることではありませんでした。併し、一座の者は、これは確に南條が知つてゐながら白を切るのだらうと認定を

してゐることは動かさないのであり、他の事と違つて、斯ういふ事を知つてゐながら知らない風をするのは罪が深いと一座の者が南條を憎みました。よし、それならば我々の手で直接に突き留めて、南條の鼻を明かしてやううと意氣込むものもありました。

「何も、さうムキになつて拙者を責めるには及ぶまい、お望みがあるならば、本人に向つて直接に打突かつて見るが宜しい、主のあるものならば己むを得んが、主のない者ならば諸君の器量次第である、若しまた將を射んとして馬覘うの筆法に出でんと思ふならば、拙者より先に老女殿を口説き落すが奥の手じや」

南條は多數に憎まれながら、斯う云つて見得を切りました。

「兎も角も、あゝして置くのは惜しいものじや」

ました。

併し、それだけでは納まる事が出来なくなつた時分に、これ等の連中の中でも飄軽な一人が犠牲となつて——この男ならば、たとへ言ひ損ねても老女から叱られる分量が少いだらうと總てから推薦された一人が、ある時老女に向つて思ひ切つてそれを尋ねて見ました。

『時につかぬ事をお聞き申すやうだが、あの奥にござるあの若い婦人は、あれは一體主のある婦人でござるか、但しは主の無い婦人でござるか……』

額の汗を拭きながら斯う云ふと、老女は果して嚴めしい面をして黙つて其の男の面を見つめて居りました。

折角切り出したけれども、斯う老女に黙つて面を見られると、二の句が次ぎ難く、しごろもごろであります。

『其れが如何したといふのでございます』

老女は意地悪く突込みました。

『其れが其の、僕が一同を代表して……』

一同を代表しては餘計な事でありませう。折角自分が犠牲者として一同から推薦され、自分も亦甘んじて犠牲になる覺悟で切り出して置きながら、老女に炙られて脆くも毒を吐いてしまつて、罪を一同へ塗りつけたのは甚だ見にくい態度でありました。

『一同とは誰方でございます』

『一同とは拙者一同』

『何でございます、それは』

苦しがつて其の男は脂汗をヂリヂリと流しました。

『その一同によくさう仰有い、女房が御所望ならば三千石の身分に

なつてからの事』

『成程』

成程といつたのは何の意味であつたか自分もわからずに、恐れ入つて其の男は退却して一同の處へ逃げ込みました。

所謂、一同の連中は逃げ返つた其の男を捉へて散々に小突き廻しました。一同を代表してといふのは武士として如何にも腑甲斐ない言分であるといふので、詰腹を切らせる代りに自腹を切つて茶菓子を奢らせられ、その上自分が其の使に行かねばならなくなりました。併し、一方にはまた老女の言分に對して不満を懐くものも無いではありません。女房が所望ならば三千石の身分になつてからといふのは、我々に對して聞えぬ一言であるといふ者もありました。老女の言葉の裏には我々を三千石以下と見てゐるものらしい、不肖ながら

我々未來の大望を抱いて國を去つて奔走する目的は、三千や一萬の處にあるのではない、それを承知で我々を世話して置く筈の老女の口から、成れるものなら三千石になつて見ると云はぬばかりの言分は心外であると論ずる者もありました。

「ナニ、さういふつもりで老女殿が三千石と云つたのではあるまい、何か他に意味がある事であらう」と言ひ和める者もありました。

三千石の意味の不徹底であつた處から議論が沸騰して、それからお君の事を呼ぶのに三千石の美人と呼ぶやうに、此の一座で誰が呼びはじめたともなく、さういふ事になりました。

三千石の美人。斯うして半無邪氣な閑話の材料となつてゐる間は宜いけれど、若し、これ等の血の氣の多い者共のうちに、眞剣に思ひ

をかける者が出来たら危険でない事もあるまい。老女の睨みが利いてゐて、食客連が相當の體面を重んじてゐる間は宜いけれど、其れを蹂躪して悔のないほどの無法者が現れた時は、やはり危険でないといふ限りはありますまい。

それから二三口して、お松は暇をもらつて相當の土産物などを調へたりなどして長者町に道庵先生を訪れました。

その時分には、先日の手錠も満期になつて手ばなしで酒を飲んでゐましたが、話が米友の事になると、道庵が云ふには、あの野郎は變な野郎で、つい此の頃、薬を買ひにやつた處が、その代金を途中で落したとか取られたとか云つて、ひどく悄氣で來たから、そんなに力を落とすには及ばねへと云つて叱りもしないのに、氣の毒がつて

出て行つてしまつた。さあ、その行先は、よく聞いて置かなかつたが、何でも本所の鐘撞堂とか云つてゐたやうだ、と云ひました。

米友の行方を道庵先生が知つてゐるだらうと、其れを待みに訪ねて來たお松は、折角の事に失望しましたけれど、なほ近いうちには便りがあるだらうと云はれて、いくらか安心して歸途に就きました。

お松が道庵先生の屋敷の門を出やうとすると出會頭に、

「おや、お松じゃないか」

「伯母さん」

悪い人に會つてしまいました。これはお松の爲には唯一の伯母のお瀧でありました。唯一人の現在の伯母であつたけれども、決してお松の爲になる伯母ではありません。前にも爲にならなかつたやうに、これからとても爲になりさうな伯母でない事は、その身なりを見ても

面つきを見てもわかるのであります。

「如何したの、まあ、お前、珍らしい、こんな處で」

「如何も御無沙汰をしましてしまいました」

「御無沙汰も何もありません、お前、此方に居たんなら居たやうに、わたしの處へ何とか云つて呉れたら宜かりさうなものじゃないか、そんなにお前、親類を粗末にしなくつたつていゝじゃないか、いくら、わたしが零落れたつて、さう見下げなくつてもいゝじゃないか」

「さういふわけでは有りませんけれど」

「まあ、こんな處で何を云つたつて仕方がないから、わたしの處へお出で、前と同じことに佐久間町にゐるよ、ここからは一足だよ、わたしも此家の先生へ用があつて來たけれど、お前に會つて見れば

御用済みだよ、さあ一緒に歸りませう、いろ／＼其の後は混み入つた事情もあるんだから、さあ、歸りませう」

伯母のお瀧は、もう自分が先きに引返してお松を自分の家へ連れて行かうといふのであります。その言葉つきから云つても、素振から云つても、以前よりはまた落ちてしまつたやうに見える事が、お松には淺ましくて堪りません。

「折角でございませけれど伯母様、今日は急ぎの用事がございませから、明日にも、きつと改めてお邪魔に上りますから」

「そんな事を云つたつて駄目ですよ、お前はもう此の伯母を出抜くやうになつてしまつたのだから油断がなりませんよ、お前に逃げられた爲に、わたしがどれ程災難になつたか知れやしない、今日は逃げやうと云つたつて逃がす事じゃありませんよ」

「伯母さん、逃るなんて、其んな事はありません」

「無い事があるものか、京都を逃げたのもお前だらう。それからお前、國々を渡り歩いてゐたといふではないか、それで一度も、わたしの處へ便りを聞かせて呉れず、當處へ來ても他人の處へは斯うして出入をしてゐながら、目と鼻の先にゐるわたしの處なんぞは見向もしないじゃないか、ほんとにお前位、薄情者はありやしない」

「けれども伯母さん、今日は如何しても上れません」

お松の言葉が意外に強かつたものだから、お瀧も少し辟易し、

「如何して來られないの」

「今日は、御主人にお暇をいたゞいて出て參りましたのですから、その時刻までに歸らなければ濟みませんもの」

「御主人、お前は何處に御奉公してゐるの、御主人といふのは如何

いふお方」

「はい、それは……」

お松は此の伯母に、今の自分の居所を云つて宜いか悪いかと躊躇しました。けれども、云はなければ却て執拗くなるだらうと思つたから、思ひ切つて云つてしまひました。

大菩薩峠

(道庵と贈八の巻了)





縮刷大菩薩峠

第三册

(第十卷四十五本)

大正十二年二月十五日
大正十四年二月五日

改版縮刷
發行
震災後九版

定價金參圓

著者 中里介山

發行者 神田豐穂

印刷者 關根慶寬

印刷所 東京市牛込區早稻田鶴卷町三番地

東京市牛込區早稻田鶴卷町三番地

早稻田印刷株式會社

東京市日本橋區數寄屋町一番地

發行所 春秋社

振替東京一四八六一番
電話大手六一八五番

中里介山著

大菩薩峠 縮刷

内容

第一集

- 1 甲源一刀流の巻
- 2 鈴鹿山の巻
- 3 壬生の島原の巻
- 4 三輪神杉の巻
- 5 龍神の巻
- 6 間の山の巻

第二集

- 7 東海道の巻
- 8 白根山の巻
- 9 女子と小人の巻
- 10 市中騒動の巻
- 11 駒井能登守の巻
- 12 伯耆安綱の巻

第三集

- 13 如法闇夜の巻
- 14 お銀様の巻
- 15 慢心和尚の巻
- 16 道庵と鱈八の巻

第四集

- 17 黒業白業の巻
- 18 安房の國の巻
- 19 小名路の巻
- 20 禹門三級の巻

定價 各集 參金 圓 送料 各集 拾金 六錢

終